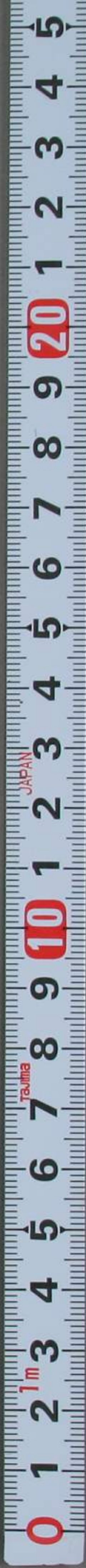


蘭使日本紀行

十一

ル 3  
1138  
11





ル 3  
1138  
卷 11



水ニ混和スルナリ以上屢論スル所ヨリペタゴ  
ラスノペレシテス學者ヲセデモニールニ地震  
アルヘキヲ前言シ速カニ衆人ヲ遠避セシメ  
タリ則チ井水ノ硫黄臭ヲ以テ察シタルナリ火  
山アルノ地ハ此ノ如キ潰崩ニ近接スルナリヨ  
セピユスアコスタハ亜墨利加ヲ徴トスカムバ  
ニールンシハリールン及ヒ他所ニハ火山アリテ不  
断煙ヲ噴キ或ハ焰ヲ發シ高ク天ヲ衝ク此地方  
ハ他ヨリハ屢地震アル所以ナリ故ニ京都ヲ距  
ル一八里大湖ニ浴テシユルヒユラマ山アリ烟

日本火山



及ヒ焰ヲ噴キ高ク騰ル。下ニハ硫黄泉アリシ、  
リコハ前年ヨリハ地震大ニ減セリ。是エトナ穴  
年月ヲ経ルニ随テ焼尽シ。通路次第ニ濶大トナ  
リ氣及ヒ火ノ通行ニ便ナレハナリヘセビエス  
山茲ニテ死セシ所ナリニウスノ焼ル前ニ大地震アリタ  
リ日本ニ於テモシユルプラマハ地震後ニ出ル  
所ナリト云フ。

十二月八日蘭囚人ハ訊官ハ左エ門ヨリ一書ヲ  
得タリエルセラクハ今日日本將軍及ヒ執政ニ  
謁見ス。此時必ラス免許ヲ願フヘシ。然レモハ左

江戸市中通行

エ門ハ蘭使ノ着服ヲ命セラレタルキニ退去セ  
リ。旅舎ノ子彼ヲ案内ス。但シ何ノ所ナルヲ知ル  
ニアラス。此時江戸所々ヲ廻歩シ。終ニ始テ城門  
ニ達セリ。城圍ニ四濠アリ之ヲ通過スルニ非常  
ニ高價ナル十門アリ之ヨリ入ル番卒アリ之ヲ  
警護ス。將軍ノ出御前ニ通過スヘキヲ命ス。茲ニ  
訊官藤左エ門及ヒマニケベ。并ニ他ノ諸官吏貴  
官藤井仙右エ門アリ示シテ曰ク。極テ大ナル木  
門アリ之ヲ過レハ將軍上様ノ方ニ赴クベシト  
上ノ所ニアリテ待ツ。一時許見テ大ニ驚キタ

三五

蘭八津



ルハ多員ノ諸君秘書記侍臣扈從不斷彼此ニ往  
シ礼義整肅相敬シ相尊フナリ後藤井仙右卫門  
和蘭人ヲ一ノ廣所ニ誘フ數門ヲ過テ貴價ナル  
廊下ニ入ル筑後殿將軍ノ名代ニテエラセラク  
ニ告テ曰ク十個ノ蘭人ハ當時大ニ罰スヘキ者  
ナリ日本海岸ヲ數日往復巡視シ恰モ害心アル  
者ニ似タリ且ツ南部港ニ於テ屢放砲シ大ニ良  
民ヲ驚カセリ然リト虽今日明ラカニ其無罪タ  
ルヲ知りタリ是其説明スル所明白ナルニ由リ  
又汝ノ言フ所ト彼等ノ言ト符合スルヲ以テ將

軍ヨリ放免シテ阿蘭人ヲ汝ニ引キ渡スナリ然  
レ氏汝尚記臆スヘシ自後日本國ニ對シテ事ヲ  
為サントスル者アレハ敢テ怒スルヲナキナリ  
エラセラク之ヲ領養シ更ニ他ノ蘭人ニモ會得  
セシムヘシ而ソ筑後殿ニ向テ誓約スベシ若シ  
日本ニ向テ不軌ヲ謀ルヲアラハ必ラス國法ニ  
照ラノ之ヲ嚴責スベキナリ既ニソ筑後殿又曰  
ク將軍上様ヨリ阿蘭十人ノ罪ヲ免シ自由ヲ得  
セシムト

此言ニ由テ一同必死ヲ免<sup>カ</sup>レタリ而ソ彼輩大ニ



驚怪スルハ一ニハ此ノ如ク久シク且危険ナル  
囚虜ノ剽カニ放免セラル事一ニハ日本將軍宮  
殿ノ構造ノ盛大ナル事ナリ夫レ古来他國ニ於  
テ壯嚴華麗ヲ誇張スル者アルモ敢テ企テ及フ  
ヘキニアラス歷山王ハ殆ント全亞細亞ヲ服從  
シ波斯ヲ押領シ自ラ人域ヲ超絶シテ神境ニ上  
レリトシタルモ客ヲ饗應スルニ飲食ヲ以テシ  
食後毛氈ヲ拂フニ方テ自ラ身ヲ屈シテ少許ノ  
燔肉ヲ拾ハルト欲セリサロモンノ象牙塔モ尚  
高シトシ美トスルニ足ラス古書中此ニ件ヲ記  
スル一左ノ如シサロモ王ハ二百個ノ圓軸ヲ  
純金ニテ鍛造セリ又金造ノ六百ノ鎌ヲ各圓軸  
ニ掛ケシメ又金造甲三百領各甲ニ金三傍ノ量  
ヲ附セシム此王更ニ大象牙塔ヲ造ラシメ更ニ  
金ヲ密貼ス此塔ニ六階アリ塔頭ノ後側ハ圓ナ  
リ兩側ニ坐所アリ二獅子茲ニアリ六階ノ双方  
皆此ノ如キヲ以テ十二獅子アリ皆華麗ナラサ  
ルナシ又サロモ王ノ飲器ハ悉ク金ニテ造ル常  
用諸器亦皆鍛金ニテ製ス絶テ銀造ヲ用ヒス蓋  
シサロモ時代ニハ銀ハ見ルニ足ラストスレバ



ナリサロモンノ榮耀ハ當時有名ナリシ所ナル  
モ今之ヲ日本將軍ノ華麗壯嚴ナルニ比スレバ  
遙カニ數等ヲ下ルヘシ又其押柄ナル制度ノ如  
キハ詳細ニ記シ難シ日本諸候ハ年年毎ニ或ハ  
東國ヨリ或ハ西國ヨリ殿下ニ伺候スルナリ堂  
ノ内壁ニ沿テ立派ナル警固室アリ其構造廊下  
ノ如シ將軍ノ坐ノ前面ニ幕ヲ掲ク旗及ヒ鎗ヲ  
飾ル廊下ニハ番兵アリ是多クハ擊劍術ニ巧ナ  
ル者ナリ其粧飾ニハ巨額ヲ費ス此輩強キ煙草  
ヲ喫ス壁ニ沿テ手銃手鎗ヲ置ク堂宇ノ下端ニ

大ナル金樋ヲ掛ク第十ノ内門ニ内殿ノ警吏アリ  
是輩日本諸候及ヒ外國使節ヨリノ献上物ヲ  
車及ヒ馬ニテ輸送スルヲ請取り下吏ヲシテ之  
ヲ運搬セシム此門ニ秘書記二人アリ一々之ヲ  
帳簿ニ登録シ又之ヲ將軍ノ聽ニ奏シ後之ヲ倉  
庫ニ納ム此倉庫ハ火災ヲ避クルニ足ル宇ノ簷  
端ニ金籠アリ其前爪ニ金球ヲ握ル此他ニハ貨  
物ヲ運搬スルアリ負擔スルアリ或ハ庫内ニ在  
テ之ヲ適宜ニ整列スルアリ故ニ大ニ雜沓スル  
ナリ此門ヲ通過スレハ柵アリ以テ將軍ノ居ト



低所トヲ區別スルナリ。櫓ノ一側ニハ銃歩群集シ一側ニハ鎗手群集ス。櫓前ニ濶所アリ之ヨリ遙カニ第三内城ノ外壁ニ高キ櫓ヲ見ル。又櫓ノ如ク立派ナル門アリ。双方ニ警兵アリ。四角ナル柱ヲ以テ長ク築ク。更ニ内進スレハ櫓アリ。高ク天ヲ衝ク。第二城ノ厚キ壁ハ其費用驚クベキ巨額ナルベシ。一櫓毎ニ警室アリ。周囲ハ閑鎖ス。簷端金樋ヲ架ス。茲ニハ貴官ノ警護アリ。其側ニ第二城ニ入ルノ門アリ。將軍ハ寢殿ニ坐ス。寢殿ヨリ正殿ニ出ルニ一扉アリ。其兩側上辺共ニ彫鏤

粧彩アリ。純金ヲ撒布ス。此扉ノ右側將軍ノ後辺ニ四人アリ。是最近ノ血族ナリ。多員ノ執政右側ニ列坐ス。而シテ四人ノ執政ハ在側ニ列坐ス。都テ皆將軍家ノ記章ヲ装ス。共ニ低坐スルヲ以テ一日之ヲ通觀スヘシ。執政ノ後ニ參政及ヒ血族四人列坐ス。又將軍ノ坐席ヲ圍繞警衛スル者殆ント三百人ナルベシ。

將軍ノ坐所ノ屋根ハ金甍ニテ蓋フ。兩角ノ各端ニ大竜アリ。純金ニテ製ス。天井ニハ諸般ノ精巧ナル彫鏤アリテ。純金ニテ粧飾ス。且彼此ニ立派

將軍座所屋根



ナル金剛石ヲ拵挿ス。屋根ハ四本ノ柱ニテ支フ。精巧ヲ極ム。第一ハ十二支ノ像ヲ刻ス。第二ハ獸類。第三ハ海産。及ヒ魚類。第四ハ金造ノ龍。及ヒ蛇ヲ彫ス。

此二柱ノ間ハ半年ハ西國諸侯。他ノ半年ハ東國諸侯伺候シ。并祀ス。皆貴價ナル進物ヲ捧テ。低頭平身。下段ノ間ニ於テス。三階ヲ過キテ。四角ナル平地ニ至ル。此外角ニハ上ノ二柱アルナリ。内方平地ノ末端ニ櫓ニ上ルノ階級アリ。此階七級アリ。立派ナル毛氈ヲ敷ク。伺候ノ諸侯低頭平身ス。

從臣二人。又下級ニアリ。容態相同シ。此諸侯ノ他從者ハ馬ヲ引テ。面ヲ地ニ接シ。恭敬ノ礼ヲ表ス。如何ナル威權アル諸侯ニテモ。殿中ニ入ルニハ三人以上ノ侍臣ヲ伴フヲ得サルナリ。將軍ハ金彩ノ衣ヲ着シ。脚ヲ折テ。踞坐ス。上衣外ニ着スル縫帛アル衣ハ。稍膝ニ及フ。而シテ左右相関ク。袴ノ側ニ垂ル。外套ノ開キタル間ニ。濶キ帶ヲ見ル。亦金彩散乱ス。其間ニ寶石珠玉ヲ簪ス。頭上ニ金冠ヲ戴ク。三柱アリ。斜ニ高ク挺出ス。此ノ如キ形状ヲ以テ。諸侯ヲ服從スルヲ以テ。日



本ヲ保持スルノ情状容易ニ察スヘキナリ則チ  
全國ノ威權全ク專制獨裁ニ出ルト又諸人ノ畏  
服スルヲ知ルヘシ將軍ノ出御ニハ必ラス警衛  
アリ壯嚴目ヲ眩ス諸侯及ヒ臣僚ヲ威嚇シ以テ  
恐怖セシムルヲ以テ唯畏服スルヲ知テ敢テ不  
軌ヲ謀ルノ念ナカラシム誰カ敢テ命ヲ背ク者  
アラシヤ凡ソ劍ヲ鞘ヨリ脱スルカ或ハ長上ニ  
向テ不敬ノトアレハ忽チ死ヲ賜フ而ソ帝ニ本  
人一身ニ止ラス更ニ親戚血族ニ及フトアリ誰  
カ復タ命ヲ拒ムトアラシヤ若シ之ヲ拒ムトア

レハ前日ニハ威權アリタル諸侯モ忽チ敗滅ヲ  
免カレス日本全國總テ威カヲ以テ壓制ス此ノ  
如キニアラサレハ諸侯ノ放肆ヲ制シ我意ヲ逞  
フスルヲ抑フルニ足ラサレハナリ

四八 免ヲ謝ス

阿蘭囚人ハ筑後殿ヨリ將軍ノ命ヲ傳テ自由ヲ  
得タルヲ以テ退去ヲ許サレタリ貴官藤井仙右  
門殿及ヒ他ノ日本貴官ニ向テ恩惠ヲ感謝セ  
リ使節アルセラクモ國人ノ放免ヲ得タルヲ大  
ニ謝セリ下高官バラリユスコルネリスヅイン  
ホールモ諸人ト共ニ阿蘭旅舎ニ歸ラントシ尚



五セラフハ  
長崎ニ帰ル

執政ニ拵辭シテ皆歡喜シテ去レリ

十二月二十四日五ルセラフハ從者及ヒ放免ノ  
國人ト一同江戸ヲ出立セリ此日進行七里川崎  
ニ一泊ス翌日川崎ヲ出テ神奈川程ヶ谷戸塚ヲ  
過キ是ニテ午餉シ藤沢田村馬入及ヒ平塚ヲ過  
キ夜ニ入り十二里ニテ大磯ニ宿セリ翌日小田  
原ニ至ル僅カニ六里ニシテ一宿ス繁華ナル地ナ  
リ箱根山ノ麓ニアリ是ヨリ難路ニ向フナリ翌  
日早發箱根ニテ中食ス山側ニ有名ナル箱根社  
アリ山中スカバリヲ過キ三島ニ達ス三島ヨリ

五セラフハ  
長崎ニ帰ル

沼津原吉原富士川ヲ過キ蒲原ニテ食事シ勇ヲ  
敷シ由井沖津ヲ過キ江尻ニ宿ス此日行程十一  
里ナルヲ以テ大ニ疲労セリ翌日稍緩發ス結構  
ナル駿河城ヲ見鞠子岡部藤枝及ヒ島田ヲ過キ  
二流ノ大井河ヲ舟渡シ金谷ニ宿ス

五ルセラフクコ  
ス日坂掛川ヲ過キ袋井ニ達ス見附及ヒ長島ニ  
至ルマテ諸所ヲ遊覽ス天竜川ヲ渉ルニ稍時ヲ  
消セリ天竜ト濱松トノ間ニ多樹アリ翌日舞坂  
荒井白須賀及ヒ二川ヲ過ク荒井ニテ中食ス吉



田ニ入ル左ニ熟田宮アリ御油ヲ過キ赤坂ニ宿ス

千六百四十四年一月一日エルセラク旅路ヲ進ム其始テ至ル村ハ藤沢ナリ之ヨリ岡崎ニ達ス更ニ進テ池鯉鮒鳴海ヲ經テ宮ニ達ス此地南海ノ灣ニアリ人口衆多家屋美麗ナリ對岸ハ衆名ナリ其間入海ニテ相距ル一七里ナリエルセラク宮ヨリ舟ニテ渡リ忽チ衆名ニ達ス茲ニ朝食ス之ヨリ富田追分四日市庄野石薬師ヲ過キ龜山ニ入り坂ノ下ニ達ス此日十一里ヲ經翌日ハ

更ニ二里ヲ加フ坂村ヲ見餘方河ヲ經テ土山ニ達ス此河ノ眺望極テ美ナリコイツカ山ノ麓ヲ過テ水口ニ達ス茲ニ中食ス再ヒ餘方河ヲ過クルニ方テ渡シ場アリ石部駅ヲ過キ夜草津ニ宿ス

森林間ニ宿ス此村ヲ過テオサキセ河ニ達ス是ミアシセ湖ニ落ル所ナリ此湖中間灣曲ニ膳所アリ立派ナル町ナリ半時ニノ末端大津アリ上ノ湖水ノ注ク所ナリ大津ニテ鮮魚ヲ食セリ其味其形和蘭ノ鱒ニ異ナルトナシ夜ニ及テエル



驚々々々  
屍置

セラク。伏水ニ達ス。是大君太閤様ノ宮殿アリテ。  
壯嚴華麗ヲ以テ有名ナル所ナリ。伏水ヨリ乗船  
シ。京都ヲ後ニ見テ。激ニ達ス。右側ニアカス。左側  
ニ牧方アリ。之ヨリ大坂ニ達セリ。伏水ヨリ十六  
里ナリ。則チエルセラク。十二日ニメ。江戸ヨリ大  
坂ニ至ル。百四十四里ヲ経タリ。放免ノ蘭人等。往  
日南部ヨリ。江戸ニ至ル。百三十二里。モ十二日ニ  
テ達シタリト云フ。

エルセラク。大坂ニ逗留スル。六日。此市外本日

テ全皆然リ。於各所ニ墓地アリ。大ニ壯嚴ヲ極ムル所

ナリ。地球上古今夥多ノ人民ヲ埋葬スルニ皆同  
シキ所ナリ。而ルニ何故ニ釈教派ニテハ之ヲ粗  
畧ニ處置スルヤ。此ノ如キ人民ノ内。希臘及ヒ羅  
錫記者ハ。デロトバギヲ標準ト為ス。此人ハ屍体  
ヲ柩ニ納メス。シテ海ニ投シ。謂ク土中ニテ腐敗  
スルモ。火ニテ焼滅スルモ。水ニ投スルモ。同一理  
ナリ。サベールス人ハ屍体ヲ不潔ナリトシ。芥溜  
ニ投ス。王屍ニ於テモ亦然リ。タキシツイベリ。及  
ヒブラセマト派ハ屍体ヲ鷹ノ食ト為ス。此風俗  
ハバルシヤイニ於テモ行ハル所ナリ。唯聊カ異

三美



ナルハ軍中ニテ戰死シタル勇者ノミヲ燒キ棄  
ルノミニテ之ヲ斂メスバルテス人ハ死肉ヲ犬  
ニ喰ハシソ而シテ殘骨ヲ埋ムヒルカニル人ハ  
大犬ヲ養ヒ死者アレハ之ヲ其食ニ充ツエスセ  
トネ人ハ父母ノ屍ヲ戶外ニ置キ血縁親戚相會  
シテ經典ヲ誦讀シ其肉ヲ截リ羊肉ト混シ調理  
シ盛膳ニ充ツマツサガリテ人ハ更ニ暴惡ナ  
リ死者ノ肉ヲ寸断シテ之ヲ食ス又舊イエレン  
ハ信心ノ為ニ死シタル親或ハ血族ノ肉ヲ以テ  
我身ヲ養フトスデルビセ人ハ男子七十歳ニ至

レハ之ヲ神前ニテ殺シ婦人モ此年齡ニ至レハ  
縊殺スヒベルボリ」ハ死人ヲ以テ珍膳ナリト  
シ之ニ粧飾ヲ附シ石ヲ繫テ海ニ投スコデ島ニ  
テハ齡六十歳ニ至レハ更ニ高年ニ及フヘキヲ  
以テ之ヲ毒殺スルナリカスピールスハ父母七  
十歳ニ至レハ之ヲ一室ニ閑居セシソ外ヨリ釘  
シ或ハ人煙絶スルノ深山ニ棄テ歸ルヲ得ス絶  
食シテ餓死セシム

此諸民ハ死ヲ処置スルニ不人情ニ残酷ヲ極メ  
或ハ少クモ之ヲ尊フニ足ラストス然ルニ他民



ハ之ニ反シ。埋葬ノ為ニ大ニ壯嚴ヲ加フルアリ。是ニ於テ無頓着ノ念一変シ却テ祭事ニ巨額ヲ消費シ。墓碑ヲ營ムニ至レリ故ニ有名ナル学士ヲセリスハ自ラ一週間内ニ死スルヲ知テ墓ヲ造レリ。歷山王ハ貴價ナル墓碑ヲ造リテ其愛馬ビユセバリユスヲ石ニ刻セリアウギユス帝又アドリアニユス及ヒコムモジユス各其死シタル馬ノ為ニ大理石碑ヲ建テタリシモン及ビサンチピユスハ有名ナル希臘ノ勇將ナリ其犬ヲ葬具ト共ニ埋メタリ猶舊埃及ニテ猫鳥及ヒ鶴ヲ絹布ニテ被ヒ塩ト芳香料トヲ以テ充填シ高塔下ノ土中ニ埋メタルカ如シ。人死テ葬ルノ墓碑粧飾頗ル盛ナリカリシノ女王アルテミシアカ其亡王マウソリユスノ為ニ築ク所ノ墓ハ尤モ有名ナリ建築總テ大理石ヲ用フ。周圍四百十一尺ナリ高サ二十五尺巧ニ刻シタル柱二十六本アリ有名ナル築土スコバスグリアルチモラウス及ヒレオカレス手ヲ下シタル所ニテ夫王ノ骨ヲ燒キ粉末トナシ之ヲ埋メ王家ノ貨財ヲ悉ク此築造ノ為ニ棄テタリ其



後アルテミシア亦死セリ。

埃及王ノ墓所ニ建テタル有名ナル塔ハ誰カ之ヲ知ラサランヤ。今尚其三基ヲ存ス。最大ナル者ハ四角ニツ上端三尖トナル。其上辺ニハ容易ニ五十人ヲ立タシムベシ。一角ヨリ他角ニ至ルノ廣サ二十四步アリ。二百五十級アリテ之ニ上ル。毎級高サ五尺一尺ハ九ステーキナリ。此四角ニ皆低キ入口アリ。身ヲ屈シテ之ヨリ内ニ入ルナリ。ペーテルベルロン曰ク。余千五百四十八年。此塔内ニ入タル時ニ左ノ如シ。狭キ穴ヲ過ル時手

三

ニ蠟燭ヲ持チ匍匐シテ一ノ空所ニ出タリ。之ヨリ左ニ折レ。又廣所アリ。精密ニ彫刻シタル廊下ヲ過キテ上ル。廊下ハ平滑ニ琢磨セル大碑石ニテ級ナシ。故ニ両側ノ手摺ヲ固堰シ進ム。十六步ニメ美ナル四角室アリ。此室内ニ長サ十二尺ノ櫃アリ。高サ五尺。幅同シ。蓋ナシ。一根ノ黒色大理石ヲ彫ミタルナリ。茲ニ埃及王ヲ葬ムルナリ。之カ為ニ此驚クヘキ塔ヲ建タリ。ベルロン更ニ各種ノ室ヲ見ル。又一井アリ。全ク石ニ成ル。又アテニ一人ハ二軍卒相闘フヲ制スルヲ怠ル。



ノ大将十人ヲ殺シ其死ヲ埋ムルニ多墓ヲ建ツ  
ヘブレオン<sup>ル</sup>ハ自ラ敵死ヲ埋ム有名ナル羅馬裁  
官バラリユス<sup>ル</sup>ハ久シク土中ニ埋メタル屍ヲ発  
掘シテ死刑ヲ施セリ旧波斯王ハペルセポ<sup>ス</sup>ス  
ニ近接スル山上ニ聳タル壁アリテ風ヲ防キ茲  
ニ置レタリ梯ヲ用フルニアラサレハ絶テ上ル  
不能ハス歴山王ハ巴比倫ニテヘプスチオン<sup>ニ</sup>  
墓所ヲ築ケリ其費用金六百噸ニ過クト云フ  
其他古代ハ記念標肖像墓碑等ノ為ニ巨額ノ財  
ヲ費ヤセリ壯麗目ヲ驚カセリ墓石ニ於テカヲ  
尽シテ粧飾セリ此數百年前ノ習慣今尚日本ニ  
存セリ則チ遺骸ヲ羅馬ノ式ニ倣テ焼キ墓所ニ  
埋葬スルナリ羅馬人ハ必ラス遺屍ヲ焼カサル  
ヲ得サルト實ニ然リ何トナレハ其旧律ニ曰ク  
未タ焼カサルノ屍ハ市中ニ埋葬スルト勿レト  
コルネリス<sup>ル</sup>ラハ羅馬ノ大将ナリ遺言シテ  
始テ其屍ヲ焼カシメタリ蓋シマリウスノ遺骸  
ヲ堀出シ之ヲアニーニス河ニ投シタルトアレ  
ハ其返報ニ我死ヲ堀出サルトアラシテ慮テナ  
リ此ヨリ以来羅馬人ハ屍ヲ焼クト倣ヘリ然



レ氏此習慣ハアソトニウス帝ノ世ニ止ミタル  
ニ方今復タ行ハル所ナリ。屍体ヲ埋葬スルニ華  
麗ナル粧飾ヲ加ヘ貴價ナル墓石ヲ用フルナリ。  
此羅瑪華奢ノ風日本ニ移リタルナリ何トナレ  
ハ屍ヲ棺ニ納メ頭ヲ前ニ屈シ合掌シテ祈念ノ  
状ヲ為サシメ白衣ヲ着ケ生時ニ於テ信仰シタ  
ル經文ヲ記シタル紙製ノ外套ヲ掛ケ四夫ニテ  
荷テ市外ニ送り火焼スルナリ多數ノ血族親友  
葬ヲ送ル者火辺ニ群集シ佛名ヲ唱フル一  
時間或ハ釈迦或ハ阿弥陀或ハ觀音或ハ一ニ  
他

仏ナリ蓋シ死者平日尤モ信仰スル所ヲ以テス  
但シ坊主ハ銅鉦ヲ敲ク燒場ハ四角ナル廣所ナ  
リ筵ニテ之ヲ囲ム四方ニ入口アリ穴ニハ焚料  
ヲ滿テ之ヲ燒ク上ニハ幕ヲ張ル燒穴ノ双方ニ  
卓ヲ置キ血ヲ以テ捏ネタル食物及ヒ香爐ヲ置  
ク香爐ニハ佳香アル木片ヲ焚ク屍ヲ細タル棺  
火場ニ近ケハ棺圍ニ長キ綱ヲ掛ケ緊縛ス各人  
此綱ヲ執リ佛名ヲ唱テ主僧ニ應スルナリ四輿  
夫棺ヲ荷テ火ヲ廻ル一三回則チ棺ヲ卸シ屍ヲ  
焚材上ニ置ク主僧火炬ヲ以テ屍ノ頭上ニ廻ラ



ス。三回ニメ終ニ之ヲ投ス。送ル所ノ近親血族ノ中一人ハ西一人ハ東ニ在テ炬ヲ執リ。屍ニ接スル。三回終ニ火ヲ焚材ニ點スルナリ。此二人ノ後ニ他ノ親戚アリテ焚材ニ香料及ヒ油ヲ注ク。焰ハ風ニ乘レテ高ク昇リ。天ヲ衝ク。遺骸ハ消滅シテ灰トナル。此時小兒及ヒ他ノ親族卓辺ニ進ミ香ヲ焚キ火ニ向テ仏ヲ念ス。此ノ如クスル後衆皆退散スルナリ。火力ヲ盛ニシ屍ノ焼ケルニ任ス。卓上ノ供物總テ火坑ニ投ス。翌日近親再ヒ來テ火坑ニ到リ骨齒及ヒ焼灰ヲ鍍金セル壺

ニ納メ之ヲ携テ歸家シ。清室ニ置キ精衣ニテ包ム。七日間精進潔斎ス。日本僧ハ此事ニ関スル者大ニ厚謝ヲ受クルナリ。第七日ニ方テ市外火焼坑ノ近傍ニ此壺ヲ埋ムルナリ。其基石ヲ盛ニスルニハ敢テ費用ヲ惜マス。

先ツ此鍍金壺ノ上ニ大石ヲ置キ接際ヲ塗墁シ。或ハ三尖。或ハ細長ク。或ハ内ニ。或ハ外ニ曲ル。而側精巧ナル彫刻アリ。或ハ獅子ノ奮勇スルアリ。或ハ一日本人ノ手ニ斧ヲ執リ之ヲ振フアリ。或ハ人ヲ斬ラントスルノ軍人アリ。或ハ花卉ヲ彫



ルアリ。是婦人ノ墓ニ多シ。此石上ニ圓或ハ四角ナル大理石柱ヲ建ツ之ニハ其人ノ生日履歴職發行狀及ヒ死日ヲ日本字ニテ刻ス。此ノ如キ碑ハ死者ノ紀念ノ為ニ大理石ニテ造ルナリ。男女兩人ノ像ハ日本式ニテ膝ヲ折テ坐ス。共ニ平日ノ衣ヲ服ス。然レモ男ハ合掌シテ祈念スルノ状ナリ。女ハ之ニ返シテ手ヲ相遠ケテ側面肩ヲ見ル。

又日本ニハ死者ノ為ニスル立派ナル墓碑ヲ見ルノミナラス。更ニ各種ノ仏ノ為ニスル殿堂ヲ見ル。墓碑ノ側ニアリ。大坂市外ニ一美寺アリ。是ニハイエネ及ヒシキユアニアリ。喪服ヲ着タル者ノ參詣スル所ナリ。其異ナル所ハシキユアビハ死シタル小兒ヲ抱ムルナリ。此仏ハ十六條ノ帛ニテ製シタル蒲團ヲ擴ケタル圓臺ニ坐ス。此圓臺ニ傍テ横木ニ銀造ノ鸚鵡アリテ止マルシキユアニハ少年ノ面容ナリ。頭髮ハ真珠索ニテ二重ニ絡フ。鬢毛ハ結束ニ挿入ス。四手ハ満星ノ潤袖ニテ被フ。右手ヲ蟠蛇ニ刺シ。掌中ニ握テ高ク之ヲ掲ク。此臂ヨリ更ニ一手ヲ出ス。掌中ニ幼



児ヲ載テ胸前ニ保ス左手ニハ日本劍ヲ執リ恰  
モ打ントスルカ如シ左手ノ半途ヨリ別手ヲ生  
ス此手ハ下ケテ貫珠ヲ執ル小児ハ日本劍ヲ注  
視シ合掌シテ祈念ノ状ヲ為ス膝ヲ折テシキユ  
アニノ右膝上ニ掛ル瀾キ袴ノ上ニ安坐ス  
但シイエネ仏ハ殊ニ第十宗ノ僧ノ大ニ尊奉ス  
ル所ナリ高キ臺上ニ安置ス此臺ハ四面透明ナ  
リ何トナレバ每側ニ四角ナル柱アリ其間ニ孔  
アリ高ク弓状ニ縁ニ達ス以テ臺ノ上面ヲ支フ  
レハナリ四面ニ満縁條アリ點アリ彫刻ス其間

三正

隙ニ日本字ヲ現ス臺上ノ各隅ニ平ナル鉢アリ  
イエネノ背後ニ右側ニ高脚香爐アリ不断香ヲ  
焚ク鉢ニハ賽銭ヲ集メ収ム三個ノ鉢ト香爐ト  
ノ間ニ丸キ二重ノ蒲團ノ上ニイエネヲ安置ス  
薄團ノ縁整然トシテ相重又イエネニハ四個ノ  
髭アル面アリ其後頭ハ合シテ一トナル金冠ヲ  
戴ク七枚アリ其三枚ハ上ニ挺出ス末端ニ圓球  
アリ多ク金剛石ヲ箱ス胸ニ二重ノ真珠串ヲ懸  
ク此貫珠ノ間ニ貴價ナル金剛石ヲ粧飾アリ左  
手ハ上ニ拳ケ掌中ニ一杖ヲ握ル日ヲ刺ス此臂



上ニ別手アリ下ニ垂ル此手ニハ剪絲ヲ執ル上  
ノ右手ニハ日本ノ草花ヲ執ル棒ニ異ナラス側  
ニ出ツ下手ハ香爐ノ前ニ達ス煙中ニ金捧豎ツ  
イエネヲ鍍金スルニ精粗アルハ其信者生計ノ  
富貧ニ應スルナリ老人夫婦ノ靈ノ憑ル所ナリ  
故ニ日々寺ニ群集參詣シテ或ハ父或ハ母或ハ  
夫或ハ婦或ハ血族ノ為ニ祈念スルナリ則チ其  
人ノ靈ヲイエネノ臺上ニ祭ルナリ

又イエネ寺ハ常ニ閉鎖ス仏像ハ露天ニ在テ廣  
所ニ安置ス寺院ハ此イエネ仏ニ奉事スル僧ノ  
居トノ間ニ在リ寺院ニハ四角ノ門アリ高シ其  
屋根末端ニ二尖アリ高ク天ヲ衝ク傍ニ樹林ア  
リ繁茂シテ廣部ヲ占ム

日本人送葬ノ此法式市外ニテ焼クテ貴價ナル  
墳墓ヲ築クテ死者ノ為ニ祭奠スルテ又其他ノ  
儀式ハ數百年來ノ舊慣ニテ地球上夥多ノ人民  
皆然ル所ナリ故ニヘーランヅ生誕前ニ既ニ久  
シク死ヲ焼クテハセルテンニ於テホークドイ  
ツ及ヒネーデルドイック佛蘭西西班牙不列典  
ニ流行シ印土羅瑪及ヒ各種ノ他人民ニ及テ所



ナリ。獨逸人及ヒガルロイセンニ就テハ希臘ノ  
記者ジオドリユスレキユリユス証アリ曰ク彼  
輩其死ヲ燒キ書冊ヲ人中ニ投ス其文言ハ己ノ  
想像ニ因テ死者ノ為ニ誦スル所ヲ記シタルナ  
リアビアニユスアレキサンドリウスハ西班牙  
人ニ告テ曰ク將軍ヒリアチユスノ屍体ヲ立派  
ニ飾リ高ク積ミ重ネタル焚材上ニ置キ之ヲ燒  
キタリ地理學者ストラボ及ヒソリニユス曰ク  
此屍ヲ燒クハ印土人ハ二千年前ヨリ行フ所  
ナリト然レモ粧飾ヲ具セス雜費ヲ要セザルナ  
リ之ニ反シテ羅馬人ハ巨額ヲ棄テ香料刀劍器  
械衣服金銀ヲ附スル壺及ヒ他器ヲ共ニ火中ニ  
投スルナリアリニウス曰クネロ帝ハ多クノ香  
料及ヒ貴價ナル油ヲポツパトト共ニ火中ニ投  
ス猶幸福ナル垂刺比垂ヨリ全一年間産スル所  
ヲ抛ツカ如シエリウスカーサルノ語ニ曰クガ  
ルロイセル人ハ生時其人ノ心ニ感動スル所  
ノ百物ヲ燒ク畜類モ更ニ奴僕モ又相識ノ雇人  
モ平日愛顧シタル者ハ同時ニ悉ク燒クト  
又ラセドモニール人ハリキエルギユスノ規則



ニ隨テ死者ヲ市街及ヒ寺院内ニ土葬スト虽然  
レ氏他ノ希臘人ハ之ヲ禁セリアテネン外ノ原  
野ニアテネン人ノ墓地アリ標柱林立ス之ニ各  
死者ノ名ヲ刻スクネノウスノシユイルリユス  
羅瑪人ニ一規則ヲ廣告ス凡ソ死人アレバ羅典  
及ヒブラミニニス法ニ據リ或ハ羅瑪内ノ田畝ニ  
埋葬スルヲ禁ス更ニアトリアニユス帝ハ凡ソ  
羅瑪領ニ屬シタル市内ニ一墓ヲ造ル者ハ罰金  
二百ギユルデレヲ徴スト然レ氏或ハ強敵ヲ制  
伏シタル將軍ノ遺灰ハ市場ニ埋ムルヲアリ此

ユセラク大阪  
ニ起ル

ノ如キハトラヤニユス帝ノ時ニモ羅瑪ニ行ハ  
レタルヲアリ  
エルセラク大阪ニ逗留スルヲ六日ノ後千六百  
四十四年一月十日出帆シ夜大阪ヲ距ルヲ三里  
ナル塚ニ投錨ス逆風強吹スルヲ以テ二日停泊  
ス而シテ投錨暗ニ乗シテ兵庫灣ニ入ル強風ニ順  
テ進行シ須摩竹島明石姫路ヲ過ク日暮空ヲ見  
ル夜中之ヲ過キ二十四時間ニ五十里ヲ歴タリ  
翌朝備中ナルヲ知テ投錨セリ之ヨリメワリタ  
ントノミヨコンシカミナガリ及ヒカルモヲ右



ニ見而ノ小島白石カロト諏訪ヨウエ及ヒ土佐  
ヲ左ニ見ル

土佐ノ住人ハ其風俗稍他ノ日本人ニ異ナル所  
アリ男子ハ夾リタル細長キ帽ヲ冠ムル其端面  
前ニ低ル肩田ニ綿衣ヲ掛ケ絹ノ內衣ヲ被フ腹  
ニ潤キ帯ヲ纏フ之ニハ大ナル粧飾ヲ具ス貴價  
ナル縫帛アリ腹ノ中部ヨリ垂テ地ニ達ス貴家  
ノ婦ハ常ニ手ニ扇ヲ執ル肩ヨリ薄キ木綿巾ヲ  
掛ケ胸ニ集メ緊束ス又背ヨリ外套ノ半途ニ下  
ル帯ハ身位ニ應シテ木綿アリ絹アリ結締ス他

ノ装容ハ他ノ日本婦人ニ異ナル所ナシ

一月十六日エルセラク上ノ関ニ投錨セリ之ヨ  
リ進テ武庫ニ至ル是ニ於テ逆風ニ逢フ舵ニテ  
少進スルノミ停泊三日入帆ヲ張テ夜下ノ関港  
ニ入ル翌日アイミシマニ投錨スエルセラク少  
時ヲ消ス夜半風ヲ得テ出帆ス翌朝平戸ニ達セ  
リ之ヲ経テ瀬戸峽ニ入ル一月二十四日長崎ニ  
着セリ出島在留ノ東印土商會ノ奴僕等神護ニ  
頼テ皆安全ニテ相見ルヲ得タリ

ヨアンフハンエルセラク一書ヲ裁シ伯帯比垂



領事ニ寄セテ十囚人放免セラレタル状ヲ報ス  
此事合衆阿蘭東印土商會ニ向フノ第二報ナリ  
抑モブレスケンズ韃靼ヲ探ラン為ニ出帆シ日  
本領地ニ漂搖シ南部港ニ着岸シ放砲シタリ是  
ニ以テ船中ノ人縛ニ就キ江戸ニ護送セラレ日  
本法ニテハ死罪ヲ免カレサル所ナルニ終ニ幸  
ニ免サレタリ將軍ハ蘭人囚虜トナリテ江戸ニ  
在ル間不適ノ接遇ナリシニエルセラクノ出府  
スルニ及テ囚人等放免セラレ再ヒ自由ヲ得タ  
ルハ意外ノ大幸ト云ヘシ此時將軍謂ク其罪許

スヘキニアラサレ氏抑モ不良ノ意アリテ故造  
シタルニアラス不注意ニ出ル所ナルヲ明察ス  
ルヲ以テ恩赦ヲ施スナリト

別檢使節

東印土商會此報ヲ得テ熟議シ終ニ一決シテ日  
本將軍ニ別途使節ヲ送り囚人放免ノ恩典ヲ謝  
シ更ニ長崎高事ノ愈安全ナランヲ冀ハシム  
此使節ヲシテ將軍ニ并謁セシムル為ニ將軍へ  
ノ進物ニ大砲二門四十磅彈ヲ射ル者諸要具ヲ  
備フ黒檀縁ノ大鏡一銀縁小鏡一各色ノ羅紗九  
枚大望遠鏡及ヒシユラウト製ノアルカテイヲ



捧ク

合衆河蘭ヨリ此ノ如キ指令ヲ伯帶比亞領事コ  
ルネリスフハンデルレインニ達シタレ氏領事  
ハ之ヲ兼諾セスシテフランコンスカロンカー  
レルレイニールスブリン及ヒゲラルドデムノ  
ルニ千六百四十九年七月二十七日次ノ規則ヲ  
建言セリ而シテ此規則ニ據テ使節ベリデルブル  
ルクホルストロベリン号船ニテ日本ニ向テ諸事  
ヲ整頓セシム文意左ノ如シ

直千ニ日本ニ向テ

ト勿レ蓋シ時期既ニ遅ク定信風ノ期將ニ盡シ  
トスレバナリ旅行前ニ諸舟士ヲ集メ吟味シ僧  
家ノ裝飾肖像經典及ヒ此細ノ事件マテモ凡ソ  
羅瑪宗ニ関係スル者悉ク之ヲ去ラシム殊ニ日  
本政府ハ曩ニブレスケンヌヲ認テマニルハヨ  
リ葡僧ヲ輸送シタルナルベシト邪推シタレバ  
ナリ日本地方ニ近接セハ必ラズ船ニ番兵ヲ附  
スヘシ宣シ能ク之ヲ遇スヘシ凡ソ日本官吏ノ  
命スル所又訊官及ヒ在出島ノ東印土商會人民  
ヨリ忠告スル所ハ謹テ之ヲ守リ敢テ我意ニ任



セテ事ヲ執ルヲ勿レ。

旅行シテ江戸ニ至ラハ青色装ノ衣ヲ服スベシ。旅中亦此ノ如クナルベシ。貴権ナル日本官吏ニ應接スルキ。或ハ市中ヲ通行スルキハ同勢ハヒレモルト羅紗服ナルベシ。將軍ニ謁見スルキ又執政家ヲ尋問スルキ又或ハ他ノ貴人ニ應接スルキニハ第三等則チ紅白混シタル記章ヲ佩フヘシ。

貴位人ノ誘導スルニアラサレバ決シテ好事又歡樂ノ為ニ遊觀縱歩スルヲ勿ルヘシ。始テ長崎ニ着港セハ速カニ使節タル所以ノ理由ヲ告クヘシ。其地ノ習慣ニ倣ヘ。長官ジルクスヌノク及ヒアントニウスブルークホルトスノ指令ニ從ヘ。且日本訳官ノ教諭ヲ守ルヘシ。使節トナリ来リタル所以ヲ明ラカニ説明シ。敢テ賤役ニ非サルヲ表スヘシ。人アリ問フアハ一々熟考シテ答フベシ。前後言辭ノ差異ナキヲ勉ムベシ。日本貴官ノ為ニ答ソラルアハ如何ナルナリナルモ唯日本法度ヲ熟知セサルヲ辭トナシ。憐察ヲ請フヘシ。東印土商會モ伯帶比亜領事モ切



ニ此事ヲ望ム。將軍ニ呈スル進物ノ目錄ヲ示セ  
ヨ。若シ懇望スル所ノ物アラハ速カニ調達スル  
トヲ勉ムヘシ。長崎奉行ニモ一分ヲ呈セヨ。  
長崎ニテモ將軍ノ府下ニテモ汝ノ職ヲ尋問セ  
ハ使節ヌルトヲ明言スベシ。東印土商會ニハ如  
何ナル説アルヤ。其職掌如何。彼輩常ニ商業ニ從  
事スルヤ。又其進物ハ阿蘭ヨリスルヤ。或ハ伯帶  
比亜ヨリスルヤ。又此進物ハ將軍ニノミナルヤ。  
或ハ執政ニモ屬スルヤ。以上件々短篇ナル答ヲ  
請フ。

東印土商會ハ合衆阿蘭諸地ノ豪商ノ集合ニ成  
ル會社ニ。賑集スル金員巨額ナルヲ以テ。全世界  
ニ通商ス。常ニ必ラス利潤アルニアラス。或ハ損  
毛スルトアリ。又問汝上ノ會社ヨリ今回ノ使節  
タルヘキヲ命セラレタルヤ。阿蘭ニテ議決シタ  
ル進物ハ孰レカ尤モ適セルヤ。ヲ出島領事ノ思  
考スル後日本諸君ヲ尊敬スル為ニ羅紗ト共ニ  
將軍ニ呈スヘシ。又接話スルニ方テハ黙シ能ハ  
サル片ハ勉テ少語ヲ以テスベシ。日本貴人ニ對  
シテハ多言ナルヨリハ寧ロ沉默スルヲ勝レリ。



トス凡ソ東印土商會ニ於テ尊敬スル諸君ニハ  
多ク進物スヘシ故ニ政羅巴毛織物ハ總テ之カ  
為ニ消費スヘシ

合衆阿蘭ハ西班牙及ヒ葡萄牙ト和睦ヲ講シタ  
ルヲ以テ日本將軍或ハ不満ノ意ヲ抱カンテ苦  
慮ナキニアラス蓋シ西班牙及ヒ葡萄牙ハ日本  
ニテハ殺スヘキノ讐敵ナリトスレハナリ少時  
前日本ニテ行ハレタル説ニテハ何故全キリス  
テンドム久時ノ戦争ノ精カヲ尽シタルニ和ヲ  
講スルニ至リタルヤト言ハン則チ答フヘシ佛

朗西及ヒ瑞典ハ獨逸帝ト共ニ合體ス此合體ハ  
噠馬国ポーレン及以太里ノ海縫スル所ナリ唯  
佛朗西ト葡萄牙トハ尚西班牙ニ抗拒セリ然レ  
氏各紛紜解釈スルニ及テ終ニ無事ニ歸セリ抑  
モ戦争ハ古今ノ經歷スル所ヲ以テスルニ之ヲ  
久フスレハ不幸上ニ愈不幸ヲ重ヌル者タルヲ  
ヲ知レハナリ但シ土耳其ハキリステンドムノ  
一般ノ敵國ニテ曾テ各城各地各國ヲ掠奪シテ  
大ニキリステンドムヲ悩マス所ナルヲ以テ今  
ヤキリステンドム互ニ結フ所ノ和睦ノ主議ハ



分裂スルノ衆カラーニシテ專ラ土耳其ニ向シ  
トスルニ過サルナリ。  
プロクホビウスニ使節タルヘキヲ命スルト左  
ノ如シ。汝勉テ諸事ノ大要ヲ領知スベシ。固ヨリ  
商人タレハ公事ニ就テ細目ヲ解セサルハ取テ  
咎ムル所ニアラス。但シ日本人ハ戈智アルヲ以  
テ汝カ阿蘭商業ニ從事スル者タルヲ十分ニ合  
點スレハ勉テ追従ノ念ヲ去ルヘシ。追従ノ念ア  
レハ實ニ東印土商會ノ所業ヲ耻カシムルニ至  
ルベシ。抑モ日本人ハ獨裁諸候ニ非サル人モ尚  
高上ノ氣アリテ追従スル者ヲ卑視スレハナリ。  
貴人ニ饗應セラルトアラハ勉テ多飲スルト勿  
レ又多言スルト勿レ。沉默ニテハ事理ヲ領解セ  
シムルト能ハサルヲ以テ。短筒ニ説明スヘシ。饗  
應ヲ感佩スルヲ速ルト七回ナルベシ。饗應セラ  
ルモ決シテ容ナリトテ安心スルト勿レ。日本人  
ニ交ハルハ極テ危シ。然レモ日本貴人若シ阿蘭  
食ヲ望ム者アラハ之ヲ辭スルトナク。速カニ調  
理シ之ヲ饗應シテ財ヲ惜ムト勿レ。自ラ未席ニ  
就キ陪食ヲ得ルヲ喜ブノ意ヲ述フヘシ。



紳士及ヒ商人ニハ稔柔ニ應接シテ使節タルノ  
容ヲ隱スヘシ貴人ニ應對スルニハ如何スヘキ  
ヤハ總テ常ニ汝ニ隨伴スルノ訳官ノ教ニ依ル  
ヘシ此訳官ハ東印土商會ノ安全ナルハ自家ノ  
幸福ヲ固定スル所以ナルヲ以テ我ニ信用ヲ得  
ントスルノ内意アル者ナリ然レモ江戸ヨリ長  
崎ニ歸着セハ各人ニ音物ヲ贈リ其歡心ヲ迎フ  
ヘシ日本貴官ニハ盛宴ヲ張テ之ヲ饗スヘシ江  
戸京都或ハ大坂ニ着スル片ハ酒鱒塩魚飯ニ和  
シタル鮓鮓カ又鶴ヲ供スヘシ總計七十タール

ヲ費スヘシ一タールハ五十ル凡ソ此諸食品ハ  
強塩味ナルヘシ而ソ日本式ノ調理ナルヘシ是  
ニハ訳官綿密ニ注意スル所ナリ  
長崎ニ着岸セハ各人速カニ上船三足下船六足  
ヲ用意スヘシ官衙ニ昇降スルニ用フヘキナリ  
日本家屋ノ制床上ニ美麗ナル席ヲ敷クカ故ニ  
決シテ踏ニテ汚スカ勿ルヘシ日本馬ニハ長船  
モスポールモ適セス  
汝自ラ手銃ヲ佩フルカ勿レ從者ヲシテ之ヲ佩  
ハシムヘシ各人同一様ノ銀装ノ劍ヲ腰ニ佩フ



ヘシ風雨ニ觸レ汚垢ヲ黠セサルヘク注意スヘシ汝將軍ニ謁見スル時從者前廳ニ待ツヘキナリ大阪ニハ麻糸ニテ編ミタル笠ヲ備フヘシ從者亦笠ヲ用フルモ更ニ油紙製ノ雨衣ヲ備フヘシ晴日ニハ之ヲ櫃ニ納メ旅裝ニ要用アラハ大阪ニテ漆塗革箱ヲ求ムヘシ夜具枕及臥具ハ日々馬ニ荷シ夜旅舎ニテ之ヲ卧用ニ供スヘシ年々將軍ヘノ旅行費用ノ算計ニ準シ總テ十ギユルデンヲ要スル者ニハ二十ギユルデンヲ至ヘ五十ギユルデンヲ要スル者ニハ百ギユルデンヲ至フヘシ

又ベトリユスブロクホヒウスハ其席序出島日本領事ノ次タルヘシ商官ジルクスヌトクアン  
トニウスブルトクホルストアンドリウスフリ  
レウス及其他ハ旧ノ如シ然レモブロクホヒウスハ全ク高事ヲ脱シ假令日本人此事ヲ議スル  
トアルモ關係スルトナク唯日本將軍ヘノ使節  
タルトニ專任スヘシ前年進物分配ニ漏レタル  
諸家ニハ二重ノ品ヲ贈ルヘシ  
長崎ヨリ江戸ニ上途スル前ニ奉行ニ筑後殿ヘ



ノ添書ヲ請求スヘシ之ヲ得ハ速ニ奉行ニ思ヲ  
謝スベシ且ツ進物ハ誰々ニ呈スヘク如何処置  
スヘキヤヲ綿密ニ聞クヘシ且ツ筑後殿ノ名ハ  
全阿蘭國人聞知シテ數年未大ニ東印土商會ノ  
為ニ恩徳アルトハ衆ノ感佩スル所ナルヲ述フ  
ヘシ將軍ヘノ献上品ヲ呈スルニハブロクホヒ  
ウス及フリシウスノ外誰人モ手ヲ觸ルト勿レ  
之ヲ正廳ニ排列スルハ詎官領解スル所ナリ  
屢將軍ノ命ニテ砲術者ヲ望ムトアリ止ムヲ得  
サルノ事故アリテ應命スルニ遲滯ス然レモ今

此術ヲ解スルノ一人アリ以テ將軍ノ用ニ備フ  
前記ノ將軍ヘノ献上品ノ外更ニ精巧淡色黒及  
ヒ紅羅紗アリ織物ニハコロラセシ及ヒ  
ダマステシアリ多分ニ贈與ニ供ス尚東印土商  
會ハ將軍及ヒ執政ニ適意ノ品ヲ撰フニ拙ナル  
トヲ言訳スヘシ  
將軍ニ謁見スルノ前常ニ何品ヲ献スルヤヲ問  
フトアリ速カニ之ニ詳答スヘシ蘭囚十人放解  
ノ厚恩ヲ謝スルニ東印土商會ヨリ微意ヲ表ス  
ル所タルヲ述フベシアンドリウスフリシウス



ハ汝ニ副テ秘書記タラシム旅行中ノ諸事ヲ記  
録スヘシヨアンハツキウスハ侍者ニ代リ賤貨  
ノ主簿タリ

殊ニ各人謹慎ニソ飲酒買娼ニ耽ルヲ勿レ之ヲ  
犯ス者ハ嚴ニ罰スヘシ爪ヲ短カクシ髪ヲ截リ  
衣服ヲ清潔ニシ屢洗浴スヘシ日本旅舎ニハ之  
ヲ行フニ便ナリ磁石藥品目鏡望造鏡ヲント酒  
甘乳酥蘭牛酪ブラレリ木以太里磁器手銃頭微  
鏡ハ望ニ任セテ各人ニ配与スヘシ血色珊瑚ハ  
時ニ臨テ彼此ノ兇輩及ヒ家族ニ与フヘシ

五

平戸候ハ東印土商會ニ二万五千ギユルデンノ  
負債アリ訟官ヲ以テ穩便ニ催促スヘシ但シ若  
シ償ハサルモ決シテ長崎奉行ニ訴テ恠氣ヲ起  
サシムルヲ勿ルヘシ何トナレバ此候火災ニ遇  
テ貧困ナレハ或ハ辨償シ能ハサルヘシ其人驕  
奢ノ風ナク尚能ク平戸候タテハ之ヲ督責スル  
ヲ勿レ總テ訟官ニ謀リ其議ニ依ルヘシ然レ氏  
員責ヲ辨償セサレハ自後復々之ニ假スヲナク  
又年々ノ進物ヲ奏スヘシ  
華美ナル衣服銀器及ヒ凡ソ粧飾ニ関スル者ハ



日本人ニ應對セサル前ニハ市街ニテモ食卓ニ  
テモ卧房ニテモ之ヲ使用スルヲ勿レ又デロベ  
ン船ハ長崎ニ停泊シテ使節ノ將軍ニ謁見ス  
ルヲ待テ速カニ他地臺灣ニモ立寄ラス直キニ  
伯帶比亞ニ歸リ伯帶比亞ヨリ十二月出帆ノ小  
舟ニテ和蘭ニ赴キ東印土會社ニ日本將軍謁見  
ノ信ヲ詳カニ報スヘシ

總テ謹慎ヲ要ス貴權人ニ對スルニハ決シテ裸  
頭ナルヲ勿レ平人ニ接スルニモ尊敬ノ意ヲ失  
スルヲ勿レ又ブロクホビウス航行ニ適セサル  
ヲ以テアンドンリースヒリシウス嚴命ヲ得タリ  
ブロクホビウスノ屍体ハ注意シテ貯藏シ腐敗  
ヲ防キ若レ旅中ニ於テ死セハ日本監官ニ示シ  
檢閲ヲ經テ埋葬スヘシ棺ヲ造ルニハ舟士ヲシ  
テ良材ヲ撰ハシムヘシヒリシウスヲ以テブロ  
クホビウスノ後役トスルニ適セリ諸事彼ニ命  
スル所ノ如クナルヘシトブロクホビウス伯帶  
比亞ヨリ日本ニ至ルノ旅中死去シタルヲ以テ  
フリンウス及ヒブルークホルストニテ使命ヲ  
全フシタルハ此書上卷ニ記スル所ノ如シ



サカリアスワーゲナールハ非常顯著ナル使節  
ナリ江戸ニテノ所業以来東印土商會ハ全印土  
及ヒ他地又日本ニ盛ニ貿易スルトナレリ  
爪哇街バンタムモラセレイカルガバヤキエコ  
ニユセレラカリタセイギンラブナンビエア  
ニアンイセボンゴイルバルマレ及ビエンクタ  
ンハコルマンドセ綿ヲ以テ胡椒キエバステ  
ラキス及カルドモムニ代フ  
ヨルタムハマジエラ島ニ對ス諸方ノ風ヲ避ク  
ベシ航海安全ナリ米及ヒ綿ヲ多産ス

東印土商會  
出諸地ニ  
三國勢  
あり  
三國勢

バンダ及ヒロントルゴウノンガペールボウルワ  
イボウレロン及ヒロツサレガエリン諸島更  
ニ三無人島ポウロモンボウロカペル及ヒボウ  
ロスワングリアリ南緯五度ニアリ胡桃ジュリ  
オンス檸檬橙味ニ肉豆蔻及弗利ヲ多産ス毎年  
四千五百ホツケルスノ肉豆蔻及ヒ弗利ヲ産ス  
一ホツケルハ蘭量百磅ニ丁ル又肉豆蔻二十磅  
ハ弗利一磅ニ丁ル丁子ハ年々三熟ス一ハバン  
ダネーシハエーエルポウテ白水ト称ス七月ハ  
月ニ熟ス丁子ヲ摘ム其水白色ニノ乳汁ノ如



シニハモレソンジマハト称ス三月ニ熟ス三八  
小コナリラナリ十一月ニ熟ス此ク如ク年々三  
回ニ収獲スルヲ以テ全熟アリ羊熟アリ此島ニ  
テハヨルタンセ<sup>セ</sup>及ヒバレイセ麻布マレ<sup>レ</sup>ンセ  
式ニ織タルコルマンドセ布ヲ望ム食物ニハ最  
モ米ヲ貴フ<sup>フ</sup> 饑饉時ニハ金銀ヨリハ珍重スルナ  
リ

テルナリテン<sup>ン</sup>ハ周圍八里各部ノ外戦争ノ為ニ  
無人トナリタル三市アリガムマラムマハ<sup>ハ</sup>四テ  
ルナリテン王ノ居所ナリマレ<sup>レ</sup>今オラニ<sup>ニ</sup>及

ヒタコメ<sup>メ</sup>今カツイル<sup>ル</sup>ヘムト云フテルナリ<sup>リ</sup>テン

ノ内ニマシアン<sup>ン</sup>モチ<sup>チ</sup>ル<sup>ル</sup>及ヒメアウ諸島屬ス

是亦テルナリ<sup>リ</sup>テン<sup>ン</sup>ト共ニ夥シク丁子ヲ産ス年

々バンクヨリニ千苞ヲ輸出ス每苞六百二十五

磅ノ價ナリ之ニ代ルニ木綿麻布及ヒ米ヲ以テ

ス

アムボイナ<sup>ナ</sup>ハ往時西班牙人ノ為ニテルナリ<sup>リ</sup>テ

ン王ノ手ヲ離レリ然ルニ和蘭アミ<sup>ミ</sup>ラ<sup>ラ</sup>ル<sup>ル</sup>ステ

ーヘンアハンデル<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>ケン<sup>ン</sup>ハ<sup>ハ</sup>戦勝テアムボイ

ナヲ奪ヒ東印土商會ノ管轄ニ屬セリ此地ニテ



ハ丁子ヲ緑ニ乗シテ八月ニ摘採ス故ニ二十五  
至百カヅカジシヲ得ベシハバチアムハ海軍下將  
シモンフーン西班牙人ノ為ニ奪ハル丁子樹夥シ  
然レ凡人負少許ニシテ之ヲ拾フニ遑アラス  
垂丁ハスモタラ北部ノ大市場ナリ胡椒金剛石  
金及ヒ錫ヲ産ス以テネカバタンセシユラトチ  
ト及ヒアラカンセ本綿ニ代フ又象牙及ヒ米ニ  
代フ垂丁ニテハ阿瑪港小島ヨリ竜延香ヲ出ス  
スモタラノ東辺彼此ニヤムベイバルムバムア  
ンドレギリ及ヒカムベルアリ南ハスモタラニ  
對スビリマンバツサエマンチユスバロスペレ  
ダムビン及ヒマナンカボアリ大洋ニ散在ス而  
メ胡椒ヲ多産ス就中ヤムベイヲ魁トス諸島中  
胡椒ノ外更ニベニウ酒及ヒ竜腦ヲ産スル地ア  
リ  
キユエグ及ヒペラハ麻六甲ノ北七度ニアリ亦  
上好胡椒ヲ産ス以テネガバタンセ綿及ヒ米ニ  
代フマナールノ挺出セル角ヲコモレトト云  
フ錫蘭トコロマンデルトノ間ニアリ真珠ヲ産  
ス



錫蘭ハ桂皮象牙真珠及ヒ少許ノ姜ヲ産ス。ビス  
ナゴルナルシंगा及ヒコロマシデルハ金剛石  
真珠木綿麻布ヲ出ス。此麻布及ヒ木綿ハ往時葡  
人一大船ヲ以テサントマス及ヒマラワカニ送  
リ之ヲ食料ニ代テ其周圍ノインジアーネンニ  
交易セリ其船不幸ニメ遅延スレハ麻六甲饑饉  
スルナリ此事千六百二年ニアリタルカ如シ。此  
時英國ノアミラールランカスタール一大船ヲ掠  
奪シバンタムニテ木綿ヲ胡椒ニ代ヘタリ  
又麻六甲ニテハ阿片染料アルモイ、ネンコセ

ニール珊瑚蔷薇水油芙蓉鉛カルサーイン硝子  
鏡及ヒ紙ヲ望ム

ニクベル諸島ハ錫蘭トスモタラトノ間北七度  
ニアリ奄延香ヲ多産ス米及ヒ他ノ食料ニ代  
勇カアル王国及ホニクベルノ北十二度ニア  
リ其大市場ハマルタムハ午エリコンシユイ  
ムカバンカネランドアラア及ヒベルマナリ茲  
ニハロベリネン及ヒ銀ヲ盛ニマシエリパタン  
セパリカチセ及ヒベンガールセ麻布カムバヤ  
乾葉絹羅紗丁子弗利肉豆蔻油芙蓉蔷薇水銅水



銀朱及ヒ珊瑚ニ交易ス

カムバヤ及ヒボルネオハベニウ酒米及ビ胡椒

ヲ産スカムボヤノ北ニ金多キライエスアリ東

ニカムバアリ茲ニハカラムバク蘆薈ニ同シヲ銀ト

目替ニス又良艦材ヲ出ス

ベシガラトハ其首府ノ名称ニ依ルナリ中部ヲ

鉛絶斯大河通貫スベシガラノ外市場アリサチ

ガム及ビカチガムナリ以忒ノ北ニ十度ニアリ

綿布麻布白布姜糖蠟米及精好金剛石ヲ産ス

強島ボルネオニハバニヤルマシングラウユ及

ヒシユワダム諸市アリ茲ニハ銅鉄水銀金硝子

羅紗木綿紙及ヒ支那錢ハピトヲ以テ美ナル金

剛石精好竜腦ミラボラネン糖蠟米桂又コロ

マンテル岸ニ産スル鼈甲及ヒ醋答ニ代フベシ

ボルネオノ東ニバタニアリ胡椒夥シキヲ以テ

名アリ支那人暹羅人皮求人ト盛ニ貿易スマレ

リス式ニテ織タル木綿ベンガラ布毛羅紗等ヲ

望ム

交趾ハ東ハベシガラニ對ス金胡椒蘆薈粗ナル

絹羅紗ヲ産ス銀ヲ望ムアヤノ島ハ交趾ヲ距ル



一十里夥シク真珠ヲ産ス

ミアコシンセオリアムボ及ヒヒチムヘンキ

エオシ此地ノ首府マトキユイエムハ真珠金銅

剛鉄鉄光鉄錫鉛水銀朱麝香シヘツト竜延香硫

黄大黄土茯苓竜腦姜糖磁器粗絹木綿麻布及ヒ

寶石ヲ産ス之ニ代ルニ精好珊瑚銀乾葉カムバ

ヤ産チモル木材英製羅紗阿片バビカワタ本綿

蘭製麻布各地景色ノ因西班牙酒結晶硝子タベ

ーテン及ヒ他ノ諸品ヲ以テス

レキエエオ及ヒペキエエオ島ニハ金ヲ産スチ

モル及ヒツロルハ檀木ヲ産ス以テ銀及ヒコロ

マシゲル布ニ代フ暹羅ニハベニウ酒口ベーネ

シ金及ヒ夥多ノ食物ヲ産ス阿蘭諸貨物ニ代フ

口ホルハ暹羅ニ對シ蘆薈及ヒ磁器ヲ産ス

カムバヤハマラバールセ岸ニ塚ス最好印土藍

ヲ産ス粗製アリ精製アリ木綿姜ミテボミネン

小麦牛酪シンギユソ根以上以テ象牙檀木鼈甲

マラバリセカルドモン支那絹マルジニセ阿仙

菜水銀明礬ビニウ酒磁器麝香阿蘭カルハノエ

ーン及ヒ洎芙蓉藍ニ代フ



支那人ヨリ日本ニ輸入スル所粗絹パンシ  
スベールンキス白及ヒ赤ギールムス  
グラーセ  
染料グセカールデンサテ  
ネン麻布蕨木黒糖  
及ヒ白糖東捕塞胡桃カイマンス  
ヘルレン赤革  
明礬蠟剛鏡綿昇承阿仙茶  
緑青茶磁器画料竜腦  
カレムバク麝香支那綿  
ハリエ及ヒ鹿皮カムメ  
ン牛皮紙及ヒ支那書籍ナリ  
阿蘭人日本ニテ  
貿易スル品ヲ記スルハ  
事ナルヘシ  
サカリアスワロゲナ  
ルハ阿蘭東印土高會社  
長マートツイケル及ヒ  
伯帶比亜在留印土領事

ヨリ千六百五十六年七月十一日附ヲ以テヨヤ  
ンボウセリオンニ交代スベキ命ヲ得タリ但シ  
日本人偏固押柄ナレハ能ク之ヲ忍ヒ交誼ヲ失  
ハサランヲ勉ムヘシ將軍殿中ニ筑後殿アリ  
東印土高會ノ為ニ大ニ保護スル人ナリ曾テ註  
文ノ鏡眼鏡觀星鏡讀書鏡ハ注意シテ之ヲ手渡  
シニスヘシ長崎奉行ノ許可ヲ得ルニアラサレ  
ハ江戸ニ出立スルヲ勿レ旅行ノ速カナルヲ欲  
セハ十二月十五日ヨリ二十日迄ノ間ニ於テス  
ヘシ此ノ如クセハ筑後殿必ラス新年  
之日本人ハ  
之ヲ正月



ト称ス我ニ月ニ於テ將軍ニ謁見セシムヘシ大  
十三日ニ丁ルニ於テ將軍ニ謁見セシムヘシ大  
阪ニテハ城代牧野佐渡様ニ進物ヲ呈セヨ其父  
ハ工匠殿ト称シ將軍ニ亞テ威權アリ佐渡様ヨ  
リ旅行券ヲ請テヨ是親切ナル人ナリ蘭使ニ接  
話ヲ許セリ周防様ハ曾テ之ヲ許サ、ルノ例ニ  
異ナリ江戸新執政ニモ進物ヲ怠ルヲ勿レ詔官  
ハ左工門ハ他ノ詔官ト共ニ使節ニ隨伴スヘシ  
是筑後殿ニ從屬スル人ナリ其誘引ニ據ルヘシ  
往時ノ長崎奉行三良左工門老年ナルヲ以テ辭  
職シ他役ニ轉セリ相逢フアハ曾テ東印土

高會ノ為ニ尽カシタル恩ヲ謝スベシ又之ヲ祝  
スルニチント酒ヲ呈スベシ詔官ハ左工門ヲシ  
テ筑後殿ニ問ハシメヨ近來改製ノ高價ナルシ  
ユラチセアルカテ、アリ出島ニアリ之ヲ將  
軍ヘノ進物ニ加フヘキヤ如何曾テ囑スル所ノ  
防火唧筒ハ近年ニ輸贈スヘシト  
又一書ヲ得タリ筑後殿園中ニ阿蘭草本ノ種子  
繁茂シ日本執政諸君之ヲ賞讚スト聞ク林檎ハ  
土中ノ根ノ湿濡センヲ勉メヨト之ヲ筑後殿  
ニ報セシム外科醫ハンスハシコ筑後殿ノ命ニ

和蘭傳書  
日本ニテ遺存ス



テ使節ニ隨テ江戸ニ赴ク蓋シ某ノ病者ニ和蘭  
紫劑ヲ興フルヲ議スルナリ筑後殿ノ家ニジン  
キルールスハ懷銃一アリ前年不用トシタル所  
ナリ筑後殿其ニヲ取り他ヲ他家ニ分配セン  
ヲ勸ム將軍執政及ヒ貴官ニ献品ノ處置ハ旅舎  
主人及ヒ訖官ト議シ適宜ニ配當スヘシ稍過分  
ノ者アラハ筑後殿ノ手ニ歸セシムベシ

又小田原城主稻葉美濃様ニ觀星鏡プロイス深  
料三種望遠鏡ニ執政ボトソケ民部様ニ綠色ド  
ロムソデーケン執政松平伊豆守ニ讀書鏡五象

牙縁アルレースガラス一鼻目鏡三第一執政伊

豆様ノ子ニ羔色英國緞子一卷白色プロイス深

料黑色ヘリンサーイン三水戸中納言様將軍ノ伯父ナリ

リニ血色珊瑚五鼻目鏡三以上各人ニ献スル所

ナリ

將軍ニハ非常高價ナル漆料プロテソーイ、シ

二木銅球地球儀結構ナル鏡生活セル駝鳥ヲ以テ

ス此鳥ハバンダニテ捕アル所鶴ヨリハ大且ツ

猛ナリ褐色羽ナリ翼ナシ尾ナシ胸ニ長圓甲ア

リ非常ニ硬ニ頸ハ大ニ鶴ニ似タリ唯冠赤青



アリス  
長崎

色ニノ硬且堅ナリ厚サ指ノ如シ上ノ方横ニ挺  
 出ス是ハ黄色ニメホリゲルストロイス大鳥ニ似  
 タリ劇ニク後ニ跳ルニ觸ル百物皆粉碎ス此  
 鳥ノ尤モ驚クヘキハ物ヲ吞ミ込ムナリ又吞込  
 タル物ヲ碎割スルナリ蜜ニ在ル所ノ物ノミナ  
 ラス熾炭ヲモ咬ミ濟ミテ吞ムナリ  
 ソーゲナール長崎ニ着セラボラセフハレノ帰  
 帆ノ事ニ掌鞅ス千六百五十六年十二月二日アホ  
 レドスラレレ船伯帯比亜ニ向テ出帆セリ後長  
 寄弟二所奉行與兵衛様出島東印工商館ニ来リ  
 ワーゲナールヲ訪フ而メ大ニ阿蘭武式ノ植園ヲ  
 愛翫セリワーゲナールハ旅行ヲ速カニシ將軍  
 ニ拝謁セシテ望ム與兵衛様出途ノ期隨意ナ  
 ラシメタルヲ以テ十二月二十七日ヲ以テ途ニ  
 就カシハ決セリ然ルニ高田訖富田ク蘭人ノ長崎奉  
 行ニ事ヲ請フヤ必ス先ツ之ヲ紳士作右衛門ニ  
 謀リ而メ後之ヲ奉行ニ告クヘキナリ作右衛門  
 殿曰ク十二月二十七日ハ日本曆法ニテハ不吉  
 日ナリト此ノ如キ誤慮ハ釋教徒ニハ久シク存  
 スル所ナリ羅馬人及ヒ希臘人ハ其邦國大厄運



遭ヒタル日ヲ以テ不吉トス。但シ或ハ之ヲ嘲ル  
 アリリユシラスソユキユルリユスハ十二月六  
 日ヲ以テダブレネハラ攻撃シタリ。是羅馬人ノ  
 事ヲ始ムルニ不吉トスル所ナリ。然ルニリユ  
 キユルリユスハ小岳ヲ以大勝利ヲ得タリマセ  
 ドニールスハ六月ヲ不幸時トセリ。然ルニ歴山  
 王ハ此妄説ニ拘ラス。六月葡王ダリラスヲ攻撃  
 シタリ。又ヘンチジラスノ猛悍パコリユスヲ撃  
 大勝ヲ得タルハ一二年前カラシユスノ羅馬ノ  
 大兵ト共ニデバルランノ者ニ大ニ敗走シタルト  
 同日ナリ。

作右衛門ハ日ヲ機覺スルニ他説アリ。蓋シワーゲ  
 ナールノ為ニ注意スル所ナリ。日本ノ十月十六  
 日ヲ不吉日ナリトメ之ヲ避ケシムルナリ。是則  
 チ歐洲ノ十二月盡日ニナリ所奉行ハ敢テ之ヲ  
 可否セス。是ニ於テ千六百五十七年一月九日ニ  
 於テワーゲナール始テ長寄ヲ出途ス。而メ出島  
 ハヨヲレラートゲシス。及ヒメイシゲルトメス  
 ステーカーニ命ニ倉庫水浸シ貨物ヲ損害スル  
 丁勿ルヘク注意セシメ。又書記ニ命ニテ室内火



ヲ失スルヲ勿ルヘク注意セシム又ワーゲナー  
ル上陸前ニ江戸ニ大火災アリノリト聞ク支那  
船三十艘日國姓爺支揮シテアレバイ及ヒシレ  
セウヨリ日本ニ至レリ然レ氏其貿易ヲ禁セリ  
蓋シ日本ノ敵國ナルマニルヲヲ経通シタルヲ  
以テナリ東印土商會屋ニ航路ヲ変セサルヲ得  
ス何トナレハ支那船退去セハ日本精銅棹及ヒ  
片船ノ價騰貴スヘケレハナリ片船ハ日本薩摩  
ニ多産スル所ナリ

ワーゲナーニ長寄ヲ出帆シテ十二日ニテ大阪  
ニ着セリ二日逗留シテ陸行ノ用意ヲ為セリ然  
レ氏此旅行支度中屋内ニ黙居スヘキヲ命セラ  
レタリ是前將軍薨去ノ祭日ニ下レハナリ此日  
全國貴賤皆大ニ謹肅シテ喪ニ居ルナリ是ニ於  
テ運夫八十五人馬四十六匹ヲ雇テ江戸ニ進物  
ヲ輸送ス

全國ノ人大ニ謹肅シテ將軍ノ喪ニ居ルハ二月  
三日ニテ年々此ノ如クスル所ナリ故ニ又之ニ  
及對シテ其婚儀ニ方テハ大ニ華美驕奢ニ慶賀

幕末  
三三



スルナリ日本ニテハ全亞細亞他地ト同シク一  
 男数女ニ婚スルナリ日本人ノ此婚禮式ハ支那  
 ヲリ習フ所ナリ是一男一女ニ限り婚スルニア  
 ラス此ノ如キ放縱ナルハ亞細亞ニテハ數百  
 年来既ニ然ル所ナリ波斯及ヒメソドレンニテハ  
 殊ニイスライリイテンハ就中各有名ナルヤロモ  
 王ハ自ラ取ツヘキ淫行ヲタタリ此ノ如キ醜  
 行ハ罰スヘキ所ナルニ舊時亞刺伯ナパチールス  
 及ヒ不列典ニテハ習慣ナリトノ怪シマサルナ  
 リ則チ一婦諸血族ノ妻ナラナリ一男アリ先  
 ツ婦家ニ至レハ戸外ニ杖ヲ置ク此時他人ノ入  
 ルヲ許サス而ノ姦淫スル者アレハ男女共ニ罪  
 アリトス某ノモレレ又ガラマシラス及ヒレ  
 ミリニハ一婦百男ニ接ス五年ノ後此衆男ヨリ  
 出ル所ノ数子ヲ集メ各男其尤モ己レニ似タル  
 一子ヲ携ヒ去ルドルバルジランハ契約シタル  
 縁女ヲ先ツ婚ノ兄弟或ハ婚ノ姉妹ノ夫ニ托シ  
 通知セシムルトス  
 又日本人ハ意ニ任セラ多婦ヲ娶ルト其一ヲ  
 正配トナシ他ハ侍妾ト為スナリ此正配ノミハ



男ト同膳ニ坐ス他ハ近侍スルノミ侍妾ハ子ヲ  
 攀クルモ又ノ死後ハ僅カニ遺物ノ一分ヲ受ク  
 ルノミ他ノ遺財ハ悉ク正配ノ子女ニ配與スル  
 ナリ此風俗亦支那ヨリ傳搬スル所ナリ支那帝  
 ハ素韃靼人ナリシニ其領地ヲ掠奪シ帝妃ヲ立  
 ルノ外更ニ全國ニ募テ最美ノ女三十人ヲ攀テ  
 之ニ婚セリ此衆婦ハ帝ノ崩スルマテハ宮中ニ  
 奉事スルナリ繼位ノ人亡帝ヲ送葬スルノ後此  
 三十婦ニ美装セシメ第二宮ニ於テ各房ヲ給シ  
 面ヲ隠シテ屈伏セシメ支那諸候三十人ヲ此房  
 ニ入レ先帝ノ最モ愛シタリトスル所ヲ撰ハレ  
 ン則チ各候一婦ヲ得テ己ノ正配ト為スナリ  
 支那人殊ニ日本人ハ婚嫁ヲ議スルニ各自ノ年  
 齡身位及ヒ系統ヲ探索ス結約スル者ハ翌日早  
 ク立派ナル輜ニテ牛馬ニ引セテ其家ヨリ市外  
 ニ出テ歌曲絃管以テ高丘ニ上レ男女道ヲ異ニ  
 シテ数千人隨從ス潤所ニ於テ式事ヲ演ス婚ノ  
 輜ノ後ニハ各種ノ三輪車ヲ是女ニ贈ルノ進  
 物ヲ載スル所ナリ日本人此風俗ヲモ支那ヨリ  
 傳授セリ男ヨリ契約婦ニ結約品ヲ贈ル婦之ヲ



己レノ又母ニ呈シ養育ノ恩ヲ謝ストス進物ノ額ハ其女愈美シ愈多シトス

舊巴比倫人ハ年々某ノ時ニ於テ衆女ヲ市場ニ集メ懇望スル者ヲシテ之ヲ撰ハシム長官アリテ之ヲ總理ス愈美ナル者ハ愈多金ヲ得醜婦ハ少金ヲ得ルナリ然レ氏醜婦亦帰スル所アリ何トナレハ美ヲ求ムルニハ巨額ノ財ヲ費スヘケレハ常人ノ容易ニスヘキニアラハレハナリ

三

ベニシールノ女ハヘニユスノ寺院ニ在テ十字ヲ購ハントスルキニカ街ニ在テ醜行ヲ為スアリ賣淫料ヲ以テ嫁装ヲ理スルナリセーブリセ人亦同快アリ街上ニ久シク異人ニ接シテ貯金ヲ以テ嫁装ヲ理スルアリ

アムタニールスハ更ニ一法ヲ立ツ之ニ依レハ處女極テ舊キ寺ニ入り純金製ノアネチヌ仏像ニ奉事シ一定時ニ至ルマテ其身ヲ献スルナリ此ノ如キ者ハアネチヌニ頼テ神聖ニナリタルトシテ敢テ之ヲ顧ル者ナシ

舊印土人ハ女ヲシテ少年群集ノ中ニ在テ身體ノ強弱運歩ノ遲速角力ノ優劣材力ノ銳鈍ヲ見



希臘人父羅瑪人ハ  
サリヨリニ贈ルハ  
ハ同シ

テ自ラ可否ヲ撰ハシムカタイルス亦同轍ヲ  
履ム然レ氏契約スルニ支死スレハ共ニ生ナリ  
ラ焼カレルヘキヲ以テス印土婦人ハ火中ニ入ル  
ハ隨意ナルノ自由アリ但ニ火ヲ避ケル者ハ不  
信ナリトノ土人ヲ之ヲ指彈スラナラシ及ヒノ  
オシスハ先ツ敵ヲ殺シタル者ニ非ナレハ敵ヲ  
婚嫁ヲ議スル者ナシ又カムマニモ曾テ敵首  
ヲテニ捧ケタル者ニアラハ婚嫁ヲ許ス者ナシ  
舊希臘人及ヒ羅瑪人ハ全ク之ニ異ナリ日本  
ニ同シ縁女ヨリ即君ニ結納ヲ贈テカルフ  
得ス故ニ羅瑪ノ執政ハ有名ナル軍將カイユス  
ハブリキラスタクネイラステキヒオ及ヒマニラ  
スキユリラズノ女ニ國庫ヨリ結婚料ヲ仕給セ  
リ蓋シ貧困ノ為ニ嫁期ヲ誤ルラ慮レハナリ  
テニオン人亦然リ勇將アリトケデスノ女ニ財  
ヲ與正リ然レ氏ソロモ及ヒレキユルギエス  
ハ共ニ希臘ノ法律家ナリ婿ノ兄弟ニ一物ヲモ  
贈ルヲ嚴禁セリ獨逸人ハ男ヨリ結婚料ヲ贈ル  
ニアラサレハ契約固定スルニアラサレ者トス  
此風俗ハビスカエールニモ行ハル所ナリ埃及



人ハ結婚料ヲ費ヤス一莫大ナリ若シ女ヨリ男  
ニ富ヲ與フルキハ男ハ埃及法則ニテ女ノ固有  
ノ買奴タルナリ又ラセデモニール人ハ巨財ヲ  
得ント欲スレハ意人ヲ娶ルヲ得スラガシテ  
ノ女ニ替ヒラセドモントナリナル者更ニ其父  
ノ死ノ為ニ約ヲ破ラントスルハ大ニ罰スヘシ  
トシ裁判官之ヲ判ヒテ曰ク是人ニ婚スルニ  
ラズ財ニ婚スルナリト

日本ニ於テモ亦然リ男ハ財産ヲ所持セテ  
ヲ娶ルヘキノミナラス更ニ婦ノ為ニ結婚料ヲ  
給スヘキナリ此風俗モ亦支那ヨリ傳フル所ナ  
リ女ヨリハ結婚料ヲ男ニ與エス其家ニ在ル  
椅子卓子臥床日履等諸具ヲ所持スルモ之ヲ携  
フナシ此諸材ハ女ヨリ男ニ贈ルノ金額ニテ購  
求スヘシトスレハナリ

日本人結婚ノ状左ノ如シ則チ女ハ上ニ記スル  
ノ丘ニ近接スレハ轎ヨリ下リ階ニ進ミ丘山ニ  
上ル男ハ地道ヨリス兩家ノ從者ハ丘下ニアリ  
唯双親及ニ多数ノ遊藝人ノミ丘ニ上ルナリ但  
シ階級ヲ具ニス男ハ右側道ヲ進ム遊藝人之ニ



從<sup>レ</sup>女ハ左側道ヲ行ク自家及<sup>レ</sup>男家ノ双親ト  
 伴<sup>フ</sup>丘頂ニ至<sup>レ</sup>ハ双親ハ婿ノ背後ニ隱<sup>レ</sup>遊藝  
 人ハ女ノ背後ニ隱<sup>ル</sup>双親ハ双々自家ノ從者<sup>ト</sup>  
 クル日覆ノ下ニ立<sup>ツ</sup>遊藝人ハ他ノ嗜好ノ地ニ  
 退<sup>キ</sup>或ハ地上ニ坐スアリ或ハ立<sup>ツ</sup>アリ絃管鐘  
 鼓ニ應<sup>シ</sup>テ踊<sup>ル</sup>アリ舞<sup>ヲ</sup>アリ此樂器ノ形状及  
 音調大ニ歐羅巴式ニ異<sup>ナ</sup>リ或ハ二本柱ニ安  
 スル尖リタル屋根ノ下ニ銅懸タル銅器ヲ太キ  
 撥<sup>ニ</sup>テ敲<sup>ク</sup>アリ各歌曲ノ譜節ニ合奏ス  
 兩家ノ親戚ト遊藝人トノ間ニ透明ナル幕ヲ張

ル上邊ハ油紙ニ成<sup>ル</sup>内面ニハ日本絹ヲ張<sup>ル</sup>ハ  
 角ノ縁アリ此日覆ノ端ニ六個ノ挺出<sup>アル</sup>尖<sup>アリ</sup>  
 リ上尖ハ細シ且<sup>ツ</sup>此日覆ヲ支柱スルニ四角ナ  
 ル八柱ヲ立<sup>ツ</sup>日覆ノ下ノ中央ニハ一對ノ卓子  
 アリ卓上ニ結縁神像ヲ置<sup>ク</sup>臂ヲ張<sup>リ</sup>手ニ長キ  
 繩ヲ執<sup>ル</sup>一端ハ膝ニ垂<sup>ル</sup>此神犬首ヲ執<sup>ル</sup>日本  
 人想像シテ和親仇儂ヲ祈<sup>ル</sup>ノ標ト為<sup>ス</sup>銅繩亦結  
 合親密ノ意ヲ表スルナリ是此像ヲ始テ造<sup>ル</sup>ル  
 ノ本旨ナリ然<sup>レ</sup>氏後人各様ノ奇怪ナル形状ヲ  
 為<sup>ル</sup>ハ牽強附會スル所ノ寓意ヲ以テスルナリ



犬首ヲ執ルノ神前ニ一ノ日本僧アリ其右側ニ  
 女左側ニ男アリ共ニ炬火ヲ執ル女此炬ニ日覆  
 ノ周圍ハケ所ニアル穴ニ點スルノ燈火ニテ火  
 ヲ移ス但シ僧ヨリ口授スル禮儀ノ語ヲ唱テ之  
 ヲ為スナリ是ニ於テ男亦炬ヲ女ノ炬ニ接シテ  
 火ヲ移スナリ此時衆人慶賀スルノ聲一齊ニ起  
 リ天ニ響ク數回及復歡聲ヲ發スナリ僧亦神歌  
 ヲ唱テ舊羅馬人及ヒ希臘人亦婚禮ノ時ニ炬火  
 ヲ焚クナリ但シ羅馬ニテハ五女年ヲシテ炬  
 火ヲ執ラシム希臘ニテハ婿ノ母炬火ヲ執ルナ  
 リ

此坊主ノ契約保証人トナルナハ極テ舊法ナリ  
 何トナレハイスライリナレハ既ニ此ノ如キ  
 風俗ヲ存シタレハナリ則チ媒介人ベトニルリ  
 エテ契約家トノ意ニ於テ新郎及ヒ新婦ニ結縁歌  
 ヲ誦セシム而メ媒介人ハ滿盞ノ酒ヲ注メ禱シ  
 曰ク我神ヨ悦樂憲愛ノ情ヲ以テ夫妻ヲ繫キ一  
 家ヲ保存セシメヨ又願フハ之ヲユダ街ニ又ユ  
 ルサレム街ニ廣告アラシムナラシメテ夫妻ノ情愛  
 ハ祭事ヨリハ樂シムヘク又小見ハ歌曲ヨリ喜



日本  
幕内三誓

フヘシト既ニノ兩人ニ酒ヲ勸ム當今ノヨリデ  
ン人ハ日本人ト相同シキトアリ則チ屋外ノ天  
幕内ニ於テ結婚ノ式ヲ行フテリ之ヲアブラハ  
ムニ誓リ蓋シ子孫蕃息シテ星辰ノ如クナルヲ  
冀フノ意ナリ婿ハ媒介人ヲ伴テ戶外ニ出ツ嫁  
之ニ隨フ歌曲ニ應シテ進歩シ樂器ヲ鳴ラシバ  
リユハハワバト唱フ蓋シ既ニ契約セリトノ意  
ナリ婦ハ夫ニ近ツクニ及テ之ヲ廻歩シ次テ亦  
夫ハ婦ヲ廻歩ス是ニ於テ兩人共ニ小麥ヲ播キ  
蕃息ヲ祈ルノ念ヲ表ス衆客相和シテ蕃息ヲ待

三六

日本  
幕内三誓

ツト唱フ而ノ皆南面スラビオ學者夫妻ニ誓フ  
ニ初婚ナレハ窄口罍ヲ以テ婦ハ再婚ナレハ  
潤口罍ヲ以テ酒ヲ注キ飲マシム且ツ神ニ祈リ  
和合伉儷ヲ期ス更ニ一盞ヲ執テ女ニ與ヘ之ヲ  
頓飲セシム是ニ於テ男其盞ヲ壁或ハ地ニ擲テ  
之ヲ碎リ一ニハユルカシム寺院ニ於テ誓フハ紀  
念トテシ一ニハ世界万物脆弱ナルヲ觀念スル  
ノ徴トス  
日本人丘上ニテ契約スル後衆客共ニ丘ヲ下ル  
或ハ嫁ニ寄スルノ金通ノ傍ニ坐スルアリ或ハ



大ニ火ヲ燒クアリ而メ婚事ニ使用スルノ諸物  
ヲ燒クアリ或ハ紡車ヲ執ルアリ或ハ麻布及ヒ  
插ミタル野菜ヲ煮ク捧クルアリ是奮羅馬人ヨ  
リ出ル所ナリ夜ニ入り車ニテ嫁ヲ婿家ニ送ル  
此時ニ麻布ヲ執ラシム是直クニ家事ヲ擔當ス  
ルノ意ヲ表スルナリ最後ニ坊主階級ヲ下ル暹  
羅牛ニ頭及ヒ多数ノ羊ヲ燔テ牲ト為シ結縁神  
ヲシテ百頭ヲ阿護セシムルヲ望ムヲ表スルナ  
リ

羅馬人ノ日本人ト異ナル所ハ神像ニ繩ヲ附ケ  
ス各様ノ神ニ各様ノ裝飾ヲ加フエガキエス  
ハ男女和約ニテ結婚スル所ニ祈ルトテジキエ  
ハハ燔ノ婦家ニ至ル所ニ祈ルトテテテハ契約ヲ永  
婿家ニ來ル所ニ祈ルニテテテハ契約ヲ永  
久ニ保持セシムル為ニ祈ルニルキネレシスハ  
處女ノ帯ヲ弛解スル所ニ祈ルニテテテハ縁  
女貞實ニメ耻ワル所ニ祈ルニテテテハ縁  
祈ルニテテテハ新婦衣ヲ脱スル所ニ祈ルニテ  
シマ之ヲ引テ婿ノ卧床ニ誘フ所ニ祈ル所ナリ  
此ノ如ク諸事整頓スル後日本婦人ハ轎ニ入り



夫家ニ荷ハル途中唱歌ニテ相慶賀ス。婿家ニテハ少年輩勇ヲ示ス。羽先ヲ簪ニ刺シ花ヲ撒シ屋ノ内外ニ剪線ヲ飾ル。客ヲ宴ス。一常ニ連八日為ニ多財ヲ酒ス。

又日本人小見襪襪中ニ於テ結縁ヲ相約スル。アリ。長スルニ及テ更ニ約ヲ重又多クハ早年ニ結婚ス。然レ氏モスコビア女ノ如ク早キニアラスモスコビアニテハ十歳十一歳ニテ結婚スル。アリ。猶埃及嵐ニ異ナラス。アリ。ウス曰ク埃及嵐ハ妊孕ニテ生ルトヨセビユススカリゲル曰ク佛國ノ一少年十一歳ニテ父タリ其妻ハ九歳ニテ妊スル所ナリ古哲ヒロニユス曰ク一少女アリ一少男ニ接シテ子ヲ攀ケタリ其男僅カニ十歳ナリト。僧官グレゴリウスデゴロイテ証言ス曰ク一少女七歳一童十二歳ナルニ接シ孕メルアリト。此等ノ事疑フヘキニ似タレ氏神聖書中ニモ此事ヲ記シタルヲ以テ實ヲ証スヘキ一確例アリアカス十一歳ノ季ニ於テ一子ヒスキアヲ攀ケタリアカス二十歳ニテ王トナリ三十六歳ニテ薨ニタル片其子ヒスキア二十五歳

ニテ薨ニタル片其子ヒスキア二十五歳



ナリ。則ち父年三十六歳ヨリ。見年二十五歳ヲ除  
スレハ。ヒスキア。ラ生タルハ。十一歳タルニ過キ  
ス。

犬首ヲ執ルノ結婚神ノ外。埃及人過信スルニ依

テ。獸首ヲ具セサル神ナシ。何トヤレハオエリス

ハ牛頭ナリ。パンハ野牛頭ナリ。アムモ。ハ羔頭

ア。ニビユ。ハ犬首ナリ。日本人ハ支那人ト同シ

ク。女神ビユサレヲ尊敬ス。其功德ハ人類ヲ蕃息ス

ルノミナリ。ス更ニ獸類。花卉。及ヒ樹木ヲ守護ス

。坊主此ノ如ク。ビユサレノ妄談ヲ誇張ス。千年前ニ

ニ三天女アリ。天ヨリ降レリ。急流河ヲ守護スル

為ナリ。アング。カンゲ。及ヒヘキエ。ト称ス

ヘキエ。ヲ浴中ニ在テ。一木ヲ見ル。其葉カラムボ

トヨリ。ハ長ク。且尖レリ。長莖ニ。黒色種子ヲ結

フヘキエ。ヲ試ニ之ヲ食シ。メルニ。其味快美ナル

ヲ覺フ。一喫忍ケ。飽滿セリ。希臘詩人ホメリエスレ

此事ヲユリシス。船中ニアル三人ニ告ク。ヘキエ

ト。此黒色種子ヲ食シ。テ其美味ニ耽リ。終ニ其地

ニ止マリ。帰ルヲ忘ル。此木。又特異効アリ。ジラス

ヨリ。テ。ス。テ。オ。パ。ラ。ス。キ。エ。ハ。プリ。ニ。ウ。ス。及ヒガ

ヨリ。テ。ス。テ。オ。パ。ラ。ス。キ。エ。ハ。プリ。ニ。ウ。ス。及ヒガ



レニユスノ説ニテハ毛髮脱落ヲ防キ血行ヲ調  
理シ経行ヲ順整シ又癩癩及ヒ頭旋ヲ滋ス  
日本人更ニ此説ヲ擴メテ曰クヘキエラハ此種  
子ヲ食スルヲ以テ妊孕セリ故ニアシゲト及ヒ  
カレゲラレノ天ニ歸テトスルヲ見テ愁傷ノ快  
ヲシ蓋シヒレ既ニ妊スルヲ以テ止マテサレテ  
得サレハナリ九月ニメヘキエト一子ヲ産ス偶  
遊歩ノ際一小島ニ至シリ其子ヲ漢家ニ托シテ  
養育ヲ受ケシメ自テ天ニ昇レリ則チアシゲル  
及ヒカシゲルレノ迹ヲ遂テナリ其子天ニ昇テレ

トスルニ能ハス終ニ漢家ニ養ハル是ヨリ子孫  
漸次ニ蕃息シ終ニ全地各所ヲ領シ各王國ノ法  
則ヲ建テリ是ヨリ後ヘキエトテピエカト稱シ  
日本人ノ大ニ尊敬スル所ナリ

河ノ前岸ニ大樹アリキリケシ木叢生繁茂ス  
双方ニ黒色ノ羽ヲ出ス象牙ニ異ナラス其幹ヲ  
飾ルニ鍍金花ヲ以テス左側ノニ大葉上ニ一ノ  
扁葉ナル貝アリ此貝中ニビエカシノ子坐シ祈念  
ノ快ヲ為ス木幹ノ上端ニ貝狀ノ座アリ其一端  
ニ一花瓶アリ一ノ曲リタル枝ヲ插スビエキ其



中間ニ坐ス。面貌婦人ノ如シ。周圍ニ光線ヲ放ツ。胸前衣中ニ十六手ヲ隠ス。支那及ヒ日本及テ領スルヲ千六百年ノ表スルナリ。此ビエサニ奉事スル快左ノ如シ。二日本人腹ニ至ルマテ水中ニ立ツ。ピエサ坐スル所ノ木幹ニ近接ス。一舟アリ堤ニ繫ク。一野牛アリ舟頭ニ立ツ。一坊主アリ舟中卓前ニ立チ手ニ剣ヲ執ル。二僕アリ兩側ニ侍ス。再ヒ旅行ヲ記スヘシ。ワロゲナール大阪ニ着シタルニニ商人アリ堺ヨリ来リ訪フ。曰ク三月前

ワロゲナール江島

ニ四船ニ銅ヲ載セテ長寄ニ送りタリ。其景况ヲ知ラスマワロゲナール曰ク安全ナルヘシ。但シ東印土商會ハ前年ノ如クニ銅ヲ高價ニハ購ハサルヘシト。次ラ一二他話ニ及ヒ相笑テ別ル。ワロゲナール旅路ヲ進メテ二月十六日江戸ニ入り先ツ到着ヲ筑後殿及ヒ長寄奉行與兵衛様ニ報シ。將軍ニ進物ヲ捧クルノ速カテラシマテ冀フ。筑後殿及ヒ與兵衛様ハワロゲナールニ答テ曰ク。正月十五日。正月八日日本ノ新年ニテ其十音ハ將軍ニ捧謁スヘシ。且ツ筑後殿ハ進物ノ目録ノミナラス

帳簿見

正月八日日本ノ新年ニテ其十音ハ將軍ニ捧謁スヘシ。且ツ筑後殿ハ進物ノ目録ノミナラス



更ニ現為ヲ請取リ。避災庫内ニ納メテ。期日ニ及  
 テ。ワリゲナール登城ス。表席ニ待ツテ。二時計。揮  
 謁スル。其時。將軍ハ。高キ臺ニ坐シ。裝飾極テ。壯麗ナ  
 リ。進物ヲ通覽シ。大ニ満足ノ快アリ。就中。阿蘭小  
 銃。剣及ヒ。華飾アル。箱尤モ。意ニ適スルニ似タリ。  
 而シテ。貴價ナルアルカテ。リ。却テ。意小セ。ナリ。  
 カ如シ。屢閉閉スルニ。辛苦ニ。且ツ。多ク。孔ヲ。穿テ  
 リ。  
 翌日。ワリゲナール。他ノ。進物ヲ。執政三人ニ。呈ス。  
 第四。カンニ。クハ。様ハ。高老ナル。以テ。重職ヲ。辞シ

タルニ。由テ。進物ヲ。容シス。他ノ。貴官人ハ。定例分  
 配ニ。預カレリ。諸家ニ。テハ。各家臣ヲ。シテ。了寧ニ  
 之ヲ。受納セシメリ。其總額。一万四千三百六十ギ  
 エル。デシ。十六。ストイフルニ。バンニ。シグナリ。旅  
 中。雜費。更ニ。大ナリ。運馬。搬支。宰領。譯士。宿料。渡船  
 料。合計。一万五千六百三十六ギ。エル。デシ。十五。ス  
 トイフルニ。一。ベロニ。シグナリ。及テ。敵。残ノ。餘。品。三千  
 タール。一。ター。シ。五。十七。入。日本。貴人。等。此。諸。品。ヲ。懇。望。セ  
 リ。然ルニ。之ニ。報。フルニ。低。價。ヲ。以。セリ。  
 筑後。殿。尤モ。滿。悦。シ。テ。曰。ク。此ノ。如キ。珍。品。ハ。未。夕



曾ヲ見サレ所ナリト此人常ニ阿蘭使節ヲ江戸  
ニテ共邸ニ拒キ丁寧ニ饗應セリ然レ氏寒威凜  
烈ナルヲ以テ同壘ニ在テ適好ノ卓ニ坐セシム  
既ニ準備成ルニ及テ自ラ窓邊ニ坐シ傍ニ熾炭  
ヲ置キワローゲナールニモ亦此ノ如クナラシム  
瘍醫ハシスハレコナル者アリ歐羅巴風ノ茶法  
調製ノ事ヲ問フ時ニ是千六百五十六年三月ニ  
日ナリ此時忽々聞ク火ヲ失スルアリ全都焼失  
スヘシト院後殿ヨリハ遙カニ北方ノ市端ヨリ  
火起リ火焰天ヲ衝ク北風強吹ルヲ以テ全都煙

中ニアリ火粉散乱スルヲ滿都雪ヲ降スカ如シ  
院後殿ワローゲナールヲ久ク止メ得サレテ遺  
憾トスレ氏此ノ如キ變事アルニ方テハ諸事ヲ  
整頓スヘキノ職務ナルヲ以テ己ムヲ得ス秘書  
記三人ヲモテ代テ饗應セシメ自ラ馳テ登城セ  
リ且ワローゲナールニモ宜シク速カニ旅舎ニ  
歸リ諸事ヲ整理スヘキヲ命セリ依テ許可ヲ得  
テ馬ヲ疾驅シテ旅舎ニ歸レリ此時火焰尚一里  
外ニアリ然レ氏漸々進來スルヲ猶海水ノ怒漲  
シテ原野ヲ浸シ谿谷ヲ滿スノ勢ノ如ク叫喚騷



阿蘭旅舎

擾ノ聲近接スルヲ聞ク。老若諸道ニ馳驅遁走シ  
蹄ノ聲沸クカ如シ。

ワ一ゲナール旅舎ニ歸リタルニ商業ノ補助ニ

ルネリスムルク及ヒ日本奴僕等机上ノ書類或

ハ敵上ノ残品銀器衣服及ヒ帳簿ヲ櫃ニ納シ包

捆ニテ之ヲ避災庫ニ納ム日本人之ヲゴツトヒ

ト称ス人アリ報セラ曰ク風向轉セリ阿蘭旅舎

ハ危キヲナシト之ヲ聞クニ及ヒ衆安心ニ貨物

運搬ヲ猶豫セリ然ルニ四五時ノ間阿蘭旅舎ア

ル市街ニ遁走人群来ニ車ニ小見及ヒ老人ヲ載

セ来リアリ故ニワ一ゲナール屋上ニ登リ眺望

スルニ火勢四方ニ蔓延シ漸々強北風ニ来セラ

進来スルヲ猶海漲ノ如ク近ヨリ進ムヲ見ル此

時源右衛門ニ問テ曰ク東印土商會ノ貨物ヲゴ

ツトヒニ納ムルヲ慥ナリトスルマ或ハ之ヲ與

兵衛様方ニ運搬スルヲ勝レリトスルマト源右

衛門曰ク此ゴツトヒハ能ク火ニ堪ノ故ニ前回

ノ火災中ニ於テ難ヲ免カレタリ且ツ貨物多

分ハ既ニ之ヲ納メリト此時奉行衆曰ク東印土

商會ノ貨櫃ハ長寄奉行與兵衛様ニ托スルヲ安



火勢既ニ数町内ニ及ヘリ方ニ立退クヘキノ

三〇

全ナリトスル。然レモ既ニゴザトシ内ニ源ク納  
メタリ是ニ於テ各窓ニ粘出ラ墮墜ニ之ヲ密塞  
シ且ツゴワトシ周圍ニ在ル建物ヲ不殘潰毀セ  
リワーブナールハ尙庫内ノ貨物ヲ運ヒ出スヲ  
勝シリトスルノ説ヲ主張ニタレ既源右衛門口  
ク火勢既ニ数町内ニ及ヘリ方ニ立退クヘキノ  
期ニ迫リトテ源右衛門ハ其母妻及ヒ子輩ヲヒ  
テ雜器中ヲ侵シテ市外ニ避ケシノワーゲナ  
ルハ源右衛門及ヒ使節ノ從者ト共ニ旅舎ヲ出  
ツ門ヲ出シハ則チ火勢既ニ接近餘時ナキヲ知

火勢既ニ数町内ニ及ヘキノ

ル大街十字路門小路總テ荷物櫃箱器材山積シ  
人負輻湊ニ相蹂躪ニテ去往紛乱相壓ニテ進退  
自由ナラス唯叫喚ニテ時ヲ費ヤスノニ或ハ家  
財ノ間ニ崩マレ或ハ後人ニ壓シ倒ガレ或ハ踏  
ミ倒ガレ或ハ荷物ノ為ニ身ヲ支ヘラレアリ或  
ハ匍匐ニテ人頭ヲ渡ルアリ既ニメ火勢倍近進  
シテ火焰及ヒ煙捲キ来テ人ヲ窒セシム  
濃煙市街ヲ掩フテ頻回日中猶夜ノ如シ時々日  
光煙中ニ藏サレ忽チ暗夜トナル火元煙ノ為  
ニ掩ハルヲ以テ何ノ方ニ向フヘキマヲ知ラス



風上ニアル人ノ驚叫ノ聲。風下ノ人ニ注意シテ  
危険ヲ報ス。ワッゲナリ。及ヒ其從者共ニ大ニ  
困苦ニ進ントスレハ前路ニ荷物及ヒ人負充積  
シテ山ノ如ク一方ヨリハ火勢相迫り一方ニハ  
火片飛散シ後ヨリハ火勢愈盛ナリ濃煙中火片  
散乱シテ猶雪片ノ北風ニ飛散スルカ如シ。或ハ  
屋宇倒レテ街上へ横ハリ人負及ヒ荷物ヲ壓潰  
レ人ハ荷物ニ障テレテ一步ヲ進ムヲ得ス。或ハ  
屋破レテ一時ニ火焰ヲ獲スルアリ。テ障盛ニ焼  
テ愈火勢ヲ壯大ニス。延焼ナルアリ飛火ナルア  
リ棟梁柱桁潰落シ半焼ノ木片路上ニ飛散シ。樓  
落チ樓覆リ瓦墮チ壁碎ク地ニ震ク音愈近シ小  
児老人或ハ虚弱ノ人恐怖シテ進ムヲ得ザル者  
墮落ノ柱梁ノ為ニ壓カレ氣絶スルアリ  
阿蘭使節及ヒ從者大ニ窘迫困厄為ス所ヲ知ラ  
ズ終ニ氣ヲ勵マシ勇ヲ鼓シテ相扶ケ相引テ充  
積セル荷物ノ上ニ登リ雜俗ニ乗シテ人ト荷物  
トノ別ヤク踏ミ行キ壁ニ沿ヒ柱ニ頼リ奉行衆  
訖士等ノ親切ナル介抱ニ依テ僅カニ進歩セリ  
若シ此ノ如キノ補助アルニ非カレハ異邦人焉



ワダツル  
右の田下  
(三)

ソ能ク焚死ヲ免カルヲ得ヘケンヤ  
久ヲシテ始テ廣所ニ出ルヲ得タリ然レ氏尚危  
險ヲ免カレタルニアラス今夜何ノ処ニ宿セシ  
テヲ求メリ人アリ忠告シテ兵衛様ノ邸ニ倚  
ルヘキヲ勸メリ到レハ則チ此邸遁人ノ充塞ス  
ル所タリ是ニ於テワダツル平戸候ノ邸ニ  
赴ケリ其住居ハ背後ニアリ一泊セシテ請ヒシ  
ニ甘ミテ領承セリ蓋シ其候東印土商會ニハ千  
金ノ負債アリタレ氏敢テ督責セサル所ナリワ  
ダツル其後尚逗留セシテ望ミタレ氏之

市外ニ會スル

ヲ許可セス是ニ於テ江戸中ヲ巡迴往復シ終ニ  
市外ニ於テ河ノ西ニテ一貧農ノ小屋ヲ借タリ  
内ニ入タレ氏火ヲシ燈ヲシ嚴寒ニ逼ラレ而テ  
此地ニモ尚遁人未ルアリ偶一信ヲ得タリワ  
ダツル退去ノ後半時荷蘭旅舎灰燼トナレリ  
ト

翌日燒所ヲ見

翌日市中ニ赴キタルニ江戸南部ノ全街悉ク灰  
燼トナルヲ見ル火勢尚猛烈ナルヲ前日ニ劣ラ  
ズ日中ニハ火焰將軍ノ居城ニ及テ大門崩レ落  
チ番兵所一半ハ濠ニ落テ沉没シ一半ハ焚材ト



ワリケナリル  
ヲ戒ム  
塔  
塔

ナル夜ニ及テ城内一田ノ火焰トナリ閃光目ヲ  
眩ス高檜亦災ヲ免カレス火勢高ク上リ天ヲ焼  
クニ似タリ其延焼スル勢ノ迅速ナルヲハ將軍  
及ニ執政第三城ノ北邊ニ在テ荃奉ニ供スルノ  
偃息所ニ向テ行クニ餘時ナカリシト云リ第二  
日諸候ノ邸第皆焼ケ市中幾千万ノ人家烏有ニ  
帰ヤリ

三月四日ワリゲナール上奉行ヲ訪テ一二ノ歩  
卒ヲ借り以テ焼ケタルゴツトレニテ銀ヲ索レ  
テ請フ奉行之ヲ諾ス則テ相伴テ旅舎ノ焼跡

ニ赴ケリ其地ニ近クニ東西ノ市街一物ヲモ遺  
カス唯一大原野トナルヲ見テ驚クノニ極目隆  
涯ナシ彼此尚煙ヲ發スルアリ二日前ニハ大市  
街ナリシ者今見ル所唯地上ニ焼残ノ柱梁堆積  
ノ灰燼ノニ家屋ノ新古ヲ論セス建築ノ精粗ニ  
拘ラス左顧右眄人ヲシテ悲傷セシムルノニ噫  
叢ニハ百万ノ八民住居スルノ繁華ナル大都府  
ニニ堂宇宮殿神社佛閣決シテアムスデハム  
ニ譲ラサル者今日僅カニ廣漠ニノ限界ナキ空  
地トナリ四十八時ノ前ニハ日本無比ノ大都府



ナル江戸皆為有トナレリ。

ワ一ゲナール進行十歩テラナルニ残酷惻然ナ  
ル屍体ヲ見ル。或ハ重キニ壓カレアリ。煙ニ  
ルアリ。手足ヲ挫折スルアリ。火ニ薰スルアリ。誰  
人ナルヤヲ辨セス。僅カニ一部ノミヲ存スルア  
リ。某ノ地ニハ三人四人相集テ窒スルアリ。薰ス  
ルアリ。焼ケルアリ。荷蘭旅舎ニ赴クノ途上ワ  
ゲナール親シノ見ル所三千以上ニ及ヘリ。

江戸ノ末端ニ一北アリ。重壁大門アリテ市中ト  
區分ス。遁人夥シク群集ニテ災ヲ避ク。故ニ門ヲ  
鎖シテ出入ヲ禁ス。而ルニ火勢終ニ壁側ノ一屋  
ニ及ヒ。忽チ蔓延スルヲ以テ之ヲ避クルニ惶  
ラス。此校所ニ在テ斃ル者八百人以上ナリト云  
フ。官吏警固スル因捕人モ火ヲ避テ此北ニ在リ  
タルニ共ニ多ク災ニ罹リ。此回死者ノ總計十萬  
人ナリト云フ。

三

ワ一ゲナールハ奉行衆雇吏二十人及ヒ源右衛  
門ヲ伴テ此家三年間ニ面燒失セリト云フ旅舎ノ燒跡ニ至リ。銀器ヲ  
索メシカ為ニ灰ヲ除カントシタルニ尚熱ニノ  
煙ヲ獲シ手ヲ下スヲ得ス。故ニ事ヲ為サズニテ



アケルノ許  
貸初ラ弊ノ

退去セリ。今ニ及テ之ヲ回想スルニ。此庫内ニハ  
六千六百四十三キユルデシヲ納ムルノ金匣其  
他銀器及ヒ献上殘品ヲ納メ置キタリ。ワラゲテ  
一ル固ヨリ此避災庫ヲ信セサルヲ以テ他ノ貸  
財ハ別ニ櫃ニ納メテ典兵衛殿ノ方ニ送シリ。故  
ニ幸ニメ巨額ヲ失ハサルヲ得タリ。無シヒ多人  
ヲ雇フテ此ノ雜指中ヲ侵シテ終夜諸所ヲ廻行  
シ。郎ヲ柔子タルカ為ニ多額ノ運賃ヲ費ス。トモ  
ナラス大ニ危険ヲ犯セリ。ワラゲサールニ從隨  
スル者日本庖人在兵衛一人ノミ。此人頗ル通辨  
ヲ為シタリ。可憫哉。途上潰シ屋ノ為ニ壓オレ。加  
之窒息ニテ死セリ。則チ屍ヲ索メテ之ヲ埋葬シ  
タリ。

ハコエ  
ロコ  
ハコエ  
ハコエ  
ハコエ

今有名ナルトルエーロノ大災ヲ憶起ス。是才智  
アル多人ノ記録アリ。テ現著ナル所ナリ。以テ江  
戸ノ大災災ニ比スヘシ。羅馬大都府ニ在テ亦此  
火ヲ諸処ニ放テ之ヲ焼クメセナリ。ケアールレヒ  
塔ノ焼クルヲ見テ悦喜シ。優ヲシテイロリニ  
ス。没落ノ快ヲ歌ハシム。トエトエウス曰ク。此ノ  
如キ暴撃苗連スル。丁六日六夜ナリト。今尚見ル



所ノ羅瑪カントベールス寺ノ礎ノ如キハ九  
日ヲ消セリト云フ。江戸ノ不幸ハ英京倫動ノ不  
幸ニ比スヘシ。千六百六十六年九月十日一麵包  
店火ヲ失ス。此屋ハテームス河ニ架スル大橋ノ  
側ニアリ。其始メ微火ナリ。偶北東風強起スルニ  
方テ火焰高ク賜リタリ。衆人カヲ盡クシテ之ヲ  
消セルトス。而ルニ三十時内ニ天ヲ衝クノ高屋  
アル舊街全ク焼失セリ。茅五日ニ方テ彈藥ヲ撒  
シタル屋ニ火ヲ放ツ者アリニ三家ニテ消滅セ  
リト云ルヨリテレベルハレレニ至ル迄四分ノ

三其間大道トナリ百物灰燼トナレリ。二万ノ人  
家及ニ不可算ノ貨財ノ外寺院八十五ヲ失ス。其  
内基督派ノ大寺カントバウリエスアリ亦災ニ  
罹レリ。然レモ江戸ノ火災ハ更ニ之ニ過リ江戸  
ニテハ人家ノ数之ニ五倍ス。邸第アリ寺院アリ  
死人十萬ナリ故ニ倫動ニ比スレハ更ニ大ナリ  
ワレゲートル從者ヲ伴テ其兵衛様ノ周旋ニテ  
適好ノ居処ヲ得タリ。火災ノ第一夜ハ寒冷中ニ  
微燒セリ。然レモ尚不足ト云フヘキニアラス。何  
トナレハ歐羅巴人及ニ印土人妾ニ廻行迷失セ

ワレゲートル  
從者  
兵衛様  
周旋  
ニテ



ハ徒、困苦ニテ多費ヲ消スヘキナリ。且ツ生命  
危険ナカラス。餓ニ悩ムヲ餓狼ニ異ナラサル  
寡婦孤兒幾千人ナルヲ知ラス。加之嚴寒ナレハ  
ナリ。源右衛門固執ニテ曰ク恐ルヘキノ大災ヲ  
免カレ。一片ノ罽羅紗アルハ尚幸ト云フヘシ。何  
ソ彼レ溶解ニタル銀銅及ヒ鉛ヲ索ムルニ汲々  
タルヤ。奉行衆、武士及ヒ兵衛様モ源右衛門ニ  
話ス曰クワリゲナール假令之ヲ必要ナリトス  
ルモ此混雜厄難中ニ在リ財ヲ堀出カレテ勉  
ムルヤト。

三三

ワリゲナール長寄ヲ獲スル前ニ、  
ヨリ筑後殿ニ向テ伯帯比亞ニ向テ出帆スルノ  
期限ヲ遅延スルヲ懇請ヒシメリ。現然危険ニ  
陥ラサラン為ナリ止ムヲナクハ期日ヲ定メ  
ラレテ願フ。筑後殿ノ武士キエネモ此ヨリモ  
其主君ニ此事ヲ願ハシメタリ。然レ此人其母  
ヲ火焰中ヨリ救ヒ出サレシトシテ終ニ共焼死  
セリ。東印土商會ヨリ此人ノ為ニ百タイ此ヲ贈  
シリ。且ハ左衛門ハ此事變ニ方テ上ノ期限遅延  
或ハ定期ヲ限ラサレテ噂スルヲ好マズ。故ニ

此等諸侯ノ  
二情ニ至ラシク  
感ス



諸事ヲ助言セザリシ。ワレゲナールノ融上殘  
リノ貨物ヲ懇望シタル諸貴人諸所ニ散乱ニ安  
藤隱岐守様及こ水戸様ノ外ハ誰モ返禮シタル  
者ナシワレゲナール此債ヲ責ムルノ機會ヲ得  
ス。饑餓中ニ在テ生命危險ニ迫レリ故ニ筑後殿  
ニ頼テ頻ニ歸去ノ許可ヲ請求ス。將軍ハ之ヲ聽  
クト雖。筑後殿ワレゲナールニ説クニ稍緩ニシ  
少ナクモ十日ヲ待ツニ非ナレハ不都合ナリト  
云キヲ以テス。此大火ノ為ニ災害頗ル多ク上下  
士民生命ヲ保存スルニ掌歎スレハナリ。殊ニ將

軍ハ日々五十人ノ為ニ米及こ他ノ食物ヲ供給  
スルニ從事スレハナリ。翌日ワレゲナールニ將軍  
ヨリ米六苞ヲ賜フ奉行衆ハ之ヲ天資トシ曰ク  
此ノ如クナル光榮ハ將軍ヨリ絶テ世界ノ他ノ  
使節ニハ莫一ナレ所ナリ。阿蘭人ハ他國人ニ勝  
レテ政府ニ恩アリトノ意ヲ表スルニ出ル所ナ  
リ。然レ氏ワレゲナールハ固ク執テ歸去スルニ  
決心セリ但ニ長壽ニ歸ルニ就テ自ラ疑フ所  
アリ。柳モ典兵衛様ハ別段親交友誼アル者ナリ



此田ノ出立ヲ促カシタルトナリ。彼曰ク傳聞  
スルニ通路不安全ナルトナリ何ノ困難カアラ  
ニヤ殊ニ荷蘭使節ニハ奉行衆ノ附屬スルアリ  
此輩ハ將軍ノ威權ヲ帯フルヲ以テ誰カ敢テ其  
指令ニ背カシテ兵衛様更ニ添言シテ曰ク汝  
ノ進物ノ答礼及ヒ惣望品ノ代價ハ後日請取テ  
長寄ニ送ルヘシト

許可ヲ得テ三月九日江戸ヲ出立セリ出立トス  
ルニ方ニ大ニ困難ニ遇ヘリ諸橋焼落キタルヲ  
以テ彼此水上ニ木片ヲ置クノニ直ニ前岸ニ達

ルヲ得ス城内ヲ通過シ別路ヲ執ラハルヲ得ス  
城内ハ悉ク灰燼ノミ石ハ碎テ散乱シ橋ハ地ニ  
倒レ番所ハ炭トナリ第一濠ニ架スル大理石橋  
ハ損傷セキレ尚渡ルニ難シ焼城ヲ組テ外門  
ニ出ルニ一時以上ヲ消セリ此ノ如クニテ始テ  
江戸ノ東側ニ出テ公道ニ達スルヲ得タリ自後  
進行ノ速カナルヲ執政ノ言ノ所ニ似ス則チ三  
月二十二日ニ故障ナク京都ニ着セリ是ニ在テ  
所司代牧野佐渡守様ヨリ時服立抜銀十枚ヲ賜  
ハレリ翌日大阪ニ送テ此地ヨリ乗船シテ四



月七日長寄ニ投錨セリ。吹テ出島ニ至リタルニ  
諸事異変アルヲ示シ

(三四)

唯少ナカラサル困難事件アリ。三原因ヨリ起ル  
所ナリ。其一長寄ノ日本人阿蘭人ニ對シテ大ニ  
不満ヲ抱ケリ。蓋シ臺灣ノ司長アレジーキコエ  
一止ハガルヨリト即チ赤狐ヲ商人ガニールニ  
送  
キノ注意ニテタムニユ。及ニキユエラングニ送  
リ石炭及ヒエラレツ必。セバ。レハスレキユエ  
ラングヨリ再ニ臺灣ニ向ハレトモタルニ。強風  
激浪ノ為ニ北ニ流チル。是ニ於テキユエラレグ

船ハ及那人リ  
向ニ新説ヲキス

ニモ臺灣ニモ到レテ得ス。漂搖スルヲ久クシ  
テ亞墨利加海湾ニ着セリ。後食糧缺乏スルニ至  
リ止ムヲ得ス。浪ニ任セタルニ長寄ニ漂着セリ。  
長寄奉行九右衛門様ハ不意ニ赤狐ノ來ルヲ見  
テ大ニ之ヲ珍愛シ。且ツニキノ旅路ニ精密ナル  
ニ就テ明細ニ之ヲ探索シテ大ニ不満トスル所  
アリ。同テ曰ク何ノ時ニ臺灣ヲ出テシヤ。何ノ時  
ニタムニユイ。及ニキユエラングニ着シタルヤ。  
該地ニテ何事ヲ為シタルヤ。タムニユイトキユ  
エラレグハノ距離若キナルヤ。何ノ時ニ如何ニ



阿蘭人ハキユイラレテラ押領シタルヤ。此城ニ  
 ハ護兵若キアルヤ。周回ノ地如何ナル利益ヲ興  
 フルヤ。其人種白或ハ黄ナルヤ。性情剛勇或ハ怯  
 懦ナルヤ。九右衛門様ニ伺テ。此答ヲ為サシメ。逐  
 一筆記シテ之ヲ江戸ニ送ル。但シ此事ニ就テ別  
 ニ處置ヲモエ。又モモ放免セラレ自由ヲ得テ後石  
 炭トエラレド皮ヲ購ヒ得テ去レリ。  
 次ヲ第二事起シテ支那ノ一船東浦塞ヨリ日本  
 へ赴ク者アリ。臺灣海ヲ過クル中。伯蒂比亞ヨ  
 リ出帆シタルドビエルク船ニ逢リガリビエルク

シテ數磅ノ蠟ヲ買入シタリ。此密買ハ阿蘭人ノ為  
 ニ大ニ耻辱ヲ長嵩ニ晒セリ。蘭人ノ言訳ヲ以テ  
 足シリトセスガリビエルク船長ハリスパレ  
 シ。及ヒ下商官ボインツハ之カ為ニアレデリキ  
 コエトヨリ入牢ヲ命セラレタリ。以テ事實ヲ  
 探索シテ裁決セシカ為ナリ。  
 第三事ハ猶大ナリ。アレウケレレ船近頃アラル  
 島トガンドル島トノ間ニテ一ノ支那船ヲ集ヒ  
 支那人十人ヲ捕エテエルクニ載セ。紅色羅紗  
 三卷。刀八本。錫十七。東其他一二ノ玩物。鍊砲口。提



ヲ搖ム。ユルノ満水ノ為ニ夕ヨシヲ漂搖ニ。強風ニ  
押流リシテ。日本ノ薩摩岸ニ漂着セリ。薩摩候ヨ  
リ早船ニテ引テ。長崎ニ護送ス。奉行捕人ヲ直ニ  
ニ船ヨリ出シ。長崎ニ入ラシム。是ニユルケ。船長  
及ヒ水夫二十七人ヲ共ニ。之ヲワリゲサシル  
ノ手ニ属シ。保管セシム。然ルニ。賤人等ユルケ。水  
夫ノ居ル所ノ戸及ヒ窓ニ。瓦石ヲ投ヒ。叫テ曰ク  
此所ニ阿蘭ノ賊船アリ。今強奪ヲ以テ。外面ヲ飾  
ル。又赤狐ニモ。此巧ヲ施シタル事敗レテ。茲ニ  
見ルカ。如ク石炭ヲ販賣スト。且ツ多人叫テ曰ク

此海賊著其苦死。目前ニアリト。奉行連カニ事ヲ  
處置之。訊官ハ奉行ノ向テ。記シテ。其答語ヲ求ム  
阿蘭人二十名。頻ニ奔走ス。諸事全ク調査スルニ  
及ヒ。全事ヲ録シテ。江戸ニ送シリ  
且ツ。掠奪シタル支那貨物ヲユルケヨリ。運搬ス  
ル。為ニ長崎賤人等。惡口雜言ス。阿蘭海賊ヨ。其死  
目前ニアリト。支那人ヨリ。ワリゲサシルニ。手書  
ヲ贈テ。ユルソヨリ。貨物ヲ船内ニ引入レタル。以  
テ。満足スト云フ。ト。虽。数日ノ後。再ニ。訴テ。曰ク。貨  
物多ク。紛失セリト。ワリゲサシル。前書ヲ示シテ



支那人貨物ヲ  
ユラキリ  
埃リ取

辨解スレハ微効ヲ為サズ是ニ於テ長壽奉行ハ  
支那人ノ需ニ應ニテ再ニユルケン検査セント  
ス

十二月十九日此事ヲ為セリ支那訳官久兵衛ト  
和蘭訳官ト共ニユルケ船内ニ入りメイシテ  
トケンズグーシメステーケル立合ニテ包櫃ヲ  
開キ一々綿密ニ注視シ久シク探索スル後見出  
ス所水支ノ櫃内ヨリ綿二十六包茶ニ束ユリゲ  
ルネスチー多数精選ニ收銅鐘一支那羽織服股引眞  
下着<sup>ニ尾</sup>帯<sup>一本</sup>枕<sup>一箇</sup>ハールルホーフトネチハークード

ケレトトテ一檢者此發覺スル物品ニ封印シ陸  
ニ運セリ則チ数千ノ日本人及ヒ支那人皆其歸  
来ヲ待チ其品ヲ高ク指エケ一々多人ニテ奉行郎  
内ニ運ヘリ久時檢閲ニテ後之ヲ支那人ニ引渡  
セリワリゲナール伯帯比亜領事ノ不行届ヲ以  
テ頻ニ記ケレハ益ナシ此ノ如キ海上ノ悪業ハ  
常刑ヲ以テ罰スヘキニアラソ所奉行輕々之ヲ  
看過スヘキニアラストニ謂ク一回之ヲ恕セハ  
後来ヲ懲スレハ能ハス今支那人ノ歎許スル所他  
事ニアラス阿蘭人伯帯比亜ヨリノ今ヲ待テ此



ワシヤノ地言  
聴カス

輩、應分ノ處置ヲ施スヘシ。印土領事ハ輕キモ  
此輩ヲ放逐スヘシ。

ソ一ゲナール其後此事ヲ伯蒂比亞ニ申シ送シ  
リ然ルニ印土領事ハ日本人ノ高慢不可耐ノ残

暴ヲ悟ルノニニ。他事ヲ言ハス。尤モ之ヲ証ス

ルハ船主ハ決ニテ關係ナキ日本人ノ如クニ水

ヲ大ニ汚シタルニアラス。又其船日本ニ行クニ

アラス支那ニ向ノ者ナリ。而シテ支那人此事ヲ日

本人ニ告ケ諸般無根ノ説ヲ立テ阿蘭人ニ施サ

シム。此時支那アミラールアウチコガロシニキ

是ノ地言  
三箇ハノ証

三ノヲ一レトシ。伯蒂比亞ニ要ニ長寄ニテ請取

リ公無トメ償ハシメタリ。クセラレノ難艱

奉行之ヲ速カニスルヲ約シ阿蘭人ハ廣東ニ

於ケル亞王ヨリ速カニ伯蒂比亞ニ向テ船ヲ損

傷シタル害ヲ償フテ強求スヘシ。ワシヤ

日本官吏ニ一書ヲ捧ケテ曰ク阿蘭人等

カ敢テ親好文証ヲ損スルヲ求メレヤ。支那ノ

不手ヲ長ク耐ルヨリハ寧ロ倉庫ヲ他ニ移サレ

トス。道理ナク目的ナク漸々徒ニ苦情ヲ増加

ス。又或ハ彼ノ經過ニ於テ要アリトセハ自後嚴

是ノ地言  
白クシテハ



二船舶ヲコシガハハモ。鞆鞆ニモ自在ニ往復  
 スヘシト。然レニ遠見アル政吏謂ク若シ日本人  
 阿蘭人ヲシテ心ヲス。庶價ニ賣リシメレカ為ニ  
 閉店スルニ至ラシメハ。壺ニ桑常和蘭献上品及  
 ヒ大貿易ヲ廢スルノミヤラス。支那人ヲモ亦此  
 ノ如ク為スヘシ。然レハモルモカ及ヒ伯蒂比  
 亜ノ賊船復々用ヲ為ス。勿レヘシト。或ハ恐  
 ル阿蘭人英葡西班牙ト合カシテ。本國ニ對シ不容  
 易ノ危難ヲ醸成スルヲアルヘシト。  
 阿蘭人ト支那人トノ間ノ紛紜劇甚ナルニ拘ラ

ス長寄ノ第二奉行共兵衛様江戸ヨリ来着ス。九  
 月二十二日ノ事ナリ。時服三十枚銀六十枚ヲ三  
 執政ヨリ寄贈セリ。是和蘭人往日ノ進物ニ答礼  
 スルナリ。其他ハ一錢ヲモ送ル者ナシ。是江戸貴  
 人中之負債トナシレナリ。最後殿モ少許ヲ寄セ  
 ス。

長寄ノ様  
 江戸ノ様

第一所奉行喜五衛門様トワレゲナリトノ間ニ  
 此原因ヨリ現著ナル事論起シリ。一日本人武左  
 衛門ナル者。伯蒂比亞ヨリ書ヲ寄ス。曰ク食料日  
 ヲ乏ス。是バシタムト。蘭トノ間ニ戰爭起リ。運



輸ノ道　レタレハナリ又東印土商會ノ景况廣  
東ニ於テ大ニ損毛セリト喜右衛門様此書言ヲ  
得テ之ヲワリゲテ示レ之ヲ解セシメ又  
何ノ原因ニテバンタムト伯蒂比亞ニ戦争ヲ起  
セルヤヲ問フ如何ニテ之ヲ鎮撫スベキヤ伯蒂  
比亞トバンタムトノ距離幾許ナルヤワリゲテ  
一ル答骸體ノ事バレタムト戦争ノ事廣東ノ景  
况女レモ聞ク所ナシ蓋ニ伯蒂比亞ヨリ来書中  
此事ヲ記セス恐ラクハ唯風聞ナルノニテナリ  
又バンタムト伯蒂比亞トハ相距ル一ノ大抵九十

里喜右衛門様又問テ何故往時停伯ヲ禁ミタル  
所ニ長寄へ多船ヲ送りタルヤ將軍命ニテ曰ク  
長寄ノ停伯ノ蘭船皆速カニ抜錨ニ望遠鏡ノ達  
セテ北ニ赴クヘシ一人モ遁逃スルヲ勿レ此  
不穩ヲ鎮靜スル為ニ更ニ後日ノ来船ヲ禁ス宜  
シク此令ヲ守ルヘシトワリゲテ一ル答テ曰ク  
此等ノ船掠奪セテ今所持スルノ船アルナ  
シト其後長寄奉行ハ一二ノ出島訳官ヲ黙陟セ  
リ此訳官長吉兵衛ヲ退ケ其子新吉葡語ニ熟セ  
ルヲ以テ上記官トナセリ又一女訳官アリ平手

和蘭訳官



奥左衛門ト称ス別ニグラスマ正ノ称アリ頗ル  
獨逸語ニ通ス乙名ト称スル吏アリ猶東印商會  
倉庫ノ守護者ト云フカ如シ給料カラス  
ハ孫平助を衛門ハ左衛門七藏及ヒ奥左衛門ナ  
リ此輩諸事ニ関係スルヲ以テ之ヲ故クハ何事  
ヲモ為ス可ラス

然ルニ江戸ヨリ一書来シ筑後殿再ヒ將軍ノ為  
ニ地球儀及ヒ天球儀ヲ望ム是血年ノ火災ニ罹  
リ他ノ進物ト共ニ焼失シタレハナリ防火御尚  
ヲ備フルヲ以テ大巻ヲ得タリトス故ニ嚴ニ命

ス他人味ニテ之ヲ使用スルノ勿シ速カニ江戸  
ニ送ルヘシト然ルニ長壽奉行ハ筑後殿ノ既ニ  
随ハス日々多人教ヲシテ此使用法ヲ習煉ニ公  
益ヲ謀ラントセリ

此書ニ添テユルケ船ニ関スル將軍ヨリノ第二  
書来シリ是ニ因テ支那ハ不具ニナリタル貨  
物ヲ明亮ニセリ其書ワ一ゲナリトボリセリ  
オシニ對シ奥兵衛様ノ前ニテ讀ニ上ケタリ其  
文意ニユルケハ他船ト共ニ伯蒂比亞ニ出帆ス  
ヘシ支那囚虜十二人ハ小船ニテ支那ニ送ルヘ



藤堂峽廻望

ニ貨物及ヒヨニワフレウケトニ副テ取ラレタ  
ル品ハ各々持主ニ返スヘシ。若シ蘭人實ニ日本  
ニ航スルノ船ヲ襲フ者トレハ其人承ス日本ニ  
渡来スルヲカレヘシ。又ワーゲテールハホウセ  
リオント共ニ速カ、伯帯比亞ニ旅行シ。臺  
ヲコイエトニ日本將軍ノ令ヲ告知スヘシ。  
然レドワーゲテール出立夕前ニ阿蘭商會ニ藤  
堂タイコロ様入来セリ。是一大候ナリ。近日伯帯  
比亞ヨリ船送セシ駝鳥ノ為ニ大金ヲ投シテ購  
求セシ。テラ望ム。但シ長寄奉行之ヲ遣ケテ曰ク



